魔法少女リリカルなのは とあるうちはの転生記

グレイ フォックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　とあるうちはの転生記

【Ｎコード】
Ｎ９８３３Ｋ

【作者名】
グレイ　フォックス

【あらすじ】
昔、うちはマダラがうちは一族を率いていた戦国時代。
とあるうちはの少年が万華鏡写輪眼を開眼した。
彼は１９才の若さで死んでしまったが、彼は死後リリカルなのは世界に転生した。
これは彼の物語。

フェイト、リニス、リインフォースが好きな作者が書いているので
原作が壊れています。

申し訳ありません。

当初よりかなり修正しました。

毎週土曜日更新になりました。

人物紹介（前書き）

はじめまして。
初投稿の小説なので、誤字、や脱字や文法の誤りが多発するかもしれません

人物紹介

またまだ設定は変わるかもしれませんが取り敢えずＦａｔｅ風に主人公を紹介。

うちは　ミズチ

筋力　Ａ
敏捷　ＡＡ
耐久　Ｂ
魔力　？？
幸運　Ｃ
宝具？？　ＥＸ

かつての戦乱の時代、万華鏡写輪眼を開眼した数少ないうちは一族の神童。

幼少の頃から戦場に出させられていたため、数多くの者の死をみてしまい、さらに最も親しい友や家族に目の前で死なれたため、血がトラウマとなった。

戦場で子供を庇い、敵の術を受けたため、意識不明になり、うちはの瞳のやりとりの実験に使われ死亡した

万華鏡写輪眼について

右目　天照（アマテラス）

目視した物とピントが合うことにより対象に黒炎を発火させる。

発火した黒炎は捉えた物が例え炎であっても、燃やし尽くすまで消えないが、術者が止めようとすれば黒炎は消える。

また、使用するたびに視力が下がる。

使用すると目から血が出てトラウマを刺激するため今は使えない。

左目　夷坐那深（イザナミ）

封印したい対象を術者が視界に入れ認識することにより、対象を瞬時に写輪眼の結界空間の内部に封印する。

封印可能な対象は術、生物、物体の一部など術者が認識出来る全ての物で、内部構造を完全に理解出来ていれば内部の一部だけを封印することもできるが多少時間がかかる。

術者が封印を解除したいと思えば結界空間から出すことが可能。

また、使用するたびに視力が大幅に下がり、

封印する対象が巨大過ぎる場合は封印できない場合もある。

（カカシの神威の強化版と思ってください。

因みに、神威との違いは瞬時に対象を消せる事、転移ではなく自身の目に封印する事、神威よりも視力低下が激しい事です。）

人物紹介（後書き）

取り敢えず人物紹介を投稿

年表（ナルト）（前書き）

整理のため書いてみました。

年表（ナルト）

一応年表を作ってみました。
（一部独自設定あり）
１６年前に九尾来襲、０年前に原作（第２部）開始と設定。

７８年前
うちはミズチが産まれる。

７４年前
ミズチがうちはマダラの弟子になる。

７３年前
ミズチが初めて戦場にでる。
また、戦場で写輪眼を開眼する。

７０年前
ミズチの親友うちはフビが目の前で死亡。
それによって万華鏡写輪眼が開眼する。
また、後に二代目火影になる千手扉間と遭遇。
互角に戦い引き分ける。
その後も幾度となく扉間と戦闘。
お互いをライバルと認め、それにより神童・ミズチとして有名になる。

６８年前

うちはと千手が休戦。
扉間とはライバルであり友という関係になる。

そして木の葉隠れができる。

６７年前
千手柱間が初代火影になり、うちはマダラが里をぬける。
それを止めようとミズチはマダラと戦うが敗北。
重症を負う。

６１年前
滝隠れの忍が柱間を暗殺しにくる。
同時にミズチは角都に遭遇し、互角に以上に戦う。
その後、角都はミズチを振り切り、柱間と戦闘。
敗北し逃走する。

６０年前
任務中に抜け忍になった角都と遭遇し戦闘になり、角都の命を４つ減らす。
同時にお互いを認める。
また、第一次忍界大戦が勃発。
半年後、戦場で賞金首狙いの角都に会い、共闘する。
その２ヶ月後、任務中に岩隠れの両天秤のオオノキなど精鋭部隊の待ち伏せにあう。
部隊はミズチ以外全員死亡。
死亡者の中に両親や恋人、友がいた事により、血がトラウマになる。

５９年前
トラウマを隠していたが、扉間にばれ、引退を迫られるが拒否して戦場にでる。

５８年前

終戦間際に霧隠れとの国境戦で戦場にいた子供を庇い死亡。

プロローグ（前書き）

誤字、脱字等が多発するかもしれません

プロローグ

＞木の葉の里＜

雨が降っているのにも関わらず、病院に多くの忍が集まっていた。

その後、白い髪の男が来た瞬間、彼らは道をあけた。

「サル。
貴様たちはここに居ろ。
シズクは俺と来い。」

「はい。」

一緒にきた少年たちは入り口で止まり、少女は男と建物の中に入っていった。

彼らは緊急手術と書かれた部屋に入り、中にいた白い服の男に聞いた。

「ミズチはどうなった？」
「すみません。
扉間様。
私たちでは手が及ばず・・・。」

「どういう事？
ミズチ様は？

生きてるんですよね？」
少女は震えながら聞いた。
「彼女は神童様とはどういう関係ですか？」
「あいつの弟子だ。」
「そうですか・・・。
お悔やみを申し上げます。
とても惜しい人を亡くしました。」
「あぁ。
そうだな。
すまんがミズチに会わせてくれるか？」
「はい。
こちらです。」
白い髪の男と少女は案内された部屋に入った
中の遺体を見た瞬間、少女は中の遺体に泣きついた。
「ミズチ様！！
なんで？
どうして？
おきてくださいよ・・・。
かえったら・・修行を・みてくれるって・・
また・・頭を撫でて・・くれるって・
言ってた・・・のに

わたしを・・・置いてき・・ぼりに・・・しないでください
目をあけてくださいよ・・・！！
ミズチ様〜！！」

白い髪の男は中の遺体の前に行って話かけた。

「ミズチ。
我が友よ。
もし、来世などがあるなら・・・。
貴様が少しでも平和な世に生まれることを祈っているぞ。
さらばだ・・・。」

後に二代目火影と呼ばれる千手扉間は言いながら黙祷した。

俺は気づいたら変な空間に浮かんでいた。

俺は確か子供を庇って・・・。

此処はどこだ？

辺りを確認しようと目を開けようとしたがなかなか開かない。

どうしようか。
暫くすると声が聞こえてきた。
「お前さんはまだ生きたいかの？」
「うん。
もう戦場はこりごりだけどね。」
「ならばお前さんを他の世界に送ってやる。
そこで生きろ。」
「いきなりなに？
あんた、何者だ？」
「ワシはお前たちが一般的に神と呼ぶ存在じゃ。」
「本当？
俺、拝んだほうがいいのかな？」
「今さらじゃから別にいいわい。」
「なんで俺なの？」
「お前さんが最後に庇った子供は将来、数多くの者を導き助けることになるんじゃ。
しかしの。
お前さんが助けなかった場合は、その子を慕う者が復讐に駆られ、
将来、数多くの者を殺してしまい世界を混乱に導いていたはずじゃ。

お前さんの選択は自分を犠牲に数多くの者を救った。
だからそれに免じてお前を転生させてやるんじゃ。
じゃが、その前に・・・」
声が聞こえなくなったと同時に、激しい頭痛して頭に様々な事が流れ込んできた。

コンビニとか飛行機とかすごい。

まるで初めから知ってたみたいに感じる。

「今お前さんに向こうの世界の一般常識を送り込んだ。
後、向こうに着いて暇になったら、天に向かって祈れ。
ワシから直々に指示を与えてやるからの。」

「わかった。
一応、礼を言うよ。
ありがとう。」

そうして俺の異世界の旅は始まった。

うちはミズチ転生記（前書き）

若干書き直しました

うちはミズチ転生記

気がついたら俺は森の中に倒れていた。

しかも、どうやら体が縮んでいる様だ。

手足が若干短い。

体の怪我もなくなっている。

極めつけは、元の世界で使用していた天照や夷坐那深で失ったはずの視力までも回復している。

特に左目なんて輪郭しか見えない位だったのに。

その時点で何も着てない事に気づいた。

裸は不味いだろ。

何か着るものがないかなと、辺りを見回してみると、俺の周りにはバックが一つ転がっていた。

開けてみると財布、指輪、メモや服などが入っていた。

神様に対してマジで感謝だな。

取り敢えず、速攻で服を着る。

メモをによると、どうやらバックの中の指輪はデバイスと呼ばれる

ものらしい。

取り敢えず指輪を手にとってみる。

「始めまして、ご主人様～」

「なっ！！」

急に声をかけられたため、驚いてしまった。

しかし、辺りを見回しても誰も居ないし、何の気配もない。

「此処ですよ～。

貴方の手の上で～す。」

どうやら、この指輪が喋べっていた様だ。

「お前はなんだ？」

「私はインテリジェントデバイスと呼ばれている物なんですけど～」

そして、俺は指輪からデバイスとは何なのかを聞いた。

要するに、術で言う印の役割をしてくれるみたいだ。

因みに起動時の形状は刀らしい。

まぁ、戦いの時も刀を使っていたため、刀は使い慣れているから大丈夫だろう。

そういえば、名を聞くのを忘れていたな。

「ところでお前に名前はあるのか？」

「残念な事に、私の名前はまだないんですよ～。
だから、ご主人様がつけてくれると嬉しいかな～。」

いきなりそんなこと言われてもな～。

暫く考えて元の世界で戦いの際に使っていた刀の名を思いだした。

「なら無峰でどうだ。」

「あは～。
わかりました。
新名称“無峰”設定しました～。」

「後、ご主人様はちょっと・・・。」

「なら、ミズチ様でどうですか？」

・・・まだ、ご主人様よりはまともかな。

「あぁ、それでいいよ。」

其れから俺は無峰から、魔法などについて教えてもらった。

それにしても、魔法があるなんてな・・・。

そう言えば、大事なことを確認してなかった。

「言い忘れたけど、俺、血がトラウマだからあんまり戦いたくないんだけど・・・
そんな奴が主でいいの？」

「大丈夫ですよ、ミズチ様～。
この世界には非殺傷設定と呼ばれるものがありますから～。
それに、トラウマごときでミズチ様を見捨てるほど、無峰のミズチ様への愛は軽くないのですよ～。
だから、安心くださいな。」

「あ、ありがとう、無峰。
そう言えば、現在地は何処かわかる？」

「少し待ってくださいね。
わかりましたよ～。
第９７管理外世界“地球”という所ですね。
この世界の気候は基本的に温暖だけど、夜は少し冷えこむみたいですね～。
なので、早めに今夜泊まる所を探したほうがいいと無峰は思いますよ～。」

「わかった。
ありがとう、無峰。」

「いえいえ。」

そう言えば写輪眼や術は使えるのかな。

急に気になってきた。

戦いは嫌いだが、自分の手札位は知っておきたい。
流石に万華鏡写輪眼は確める気にならないが。
天照はトラウマが怖くて使えないし、夷坐那深は今使っても意味がないしな。
そう考えながら、チャクラを練る。
どうやら、チャクラは練れるようだ
眼にそのチャクラを流し写輪眼を使う
どうやらこれもいいみたい。次にチャクラを練り、火遁の印を結ぶ。
「火遁・豪火球の術。」
ヤバい。
普通に出来たが、周りが森なのを忘れていた。
直ぐに水遁の印を結ぶ。
「水遁・爆水衝波。」
口から大量の水を吐き出す。
一応、火は消せたが今度は辺りが水田のようになった。
「ミズチ様〜。

今のが忍術なのですか？」

「知ってるのか？」

「こう見えても私、神に造られたデバイスですから～。
嘗めちゃいけませんよ～。
それより早くここから離れたほうがいいですよ～。
さっきの忍術は派手でしたし～」

（だれ・たすけ・・だ・い・
わた・・・きえ・・けに・いか・・の・・）

急に頭に声が響いた。

「無峰、今のはなに？」

「恐らくは念話だと思いますよ～。
助けを求めてるみたいでしたが、どうしますか？」

「場所は解るか？」

「あは～。
無峰にかかれば余裕ですよ～。
此処から北に一キロ位の場所だと思います～。」

「なら行ってみるかな。」

俺はカバンを持って瞬身の術で肉体を活性化させその場所に向かった

無峰が言った所に近付いてきたため、チャクラで眼を活性化させて見ると、ネコが怪物に襲われていた。

「っ・・・誰か・・誰か・助けてぇぇぇ！！」

ネコが悲鳴をあげた。

怪物は振り上げた腕を振り下ろしそうとしている。

忍術では間に合わない。

仕方ないな。

まさか、ネコのためにこれを使う時がくるとはな。

自分自身に呆れつつ、大量にチャクラを練り、左目におくり術を発動させる。

「封印術・夷坐那深！！」

既に、怪物に視界に入っている。

怪物の周りの空間が歪み、怪物はネコを殺す直前に結界空間に封印された。

何とか間に合ったか・・・。

「くっ」

次の瞬間左目に激痛がはしる。

「ミズチ様っ。」

無峰が心配そうに声をかけてくる。

「俺は大丈夫だ。
それよりも。」

痛みはすぐに治まったため、ネコに近寄ってみる抱き上げてやる。

「ありが・・とう・・・。」

猫はお礼を言うと気を失った。

取り敢えず、体を見てみると、かなりの傷があった。

見た感じ、うちはの里で捕虜が拷問されているのを見た時に、見えた傷とかなり似ている気がする。

お礼を言ったりしたから恐らく、人間程度の知能を持っているのだろう。

それに、よく見ると泣いていた様に顔の周りがかなり濡れている。

見た感じ致命傷になるような傷はないが、俺は獣医じゃない。

せっかく助けたんだし、このままを放置したら、間違いなく死んでしまうだろう。

そういえば、ネコとはいえ久しぶり感謝されたな。
感謝されるのも悪くないな。
結論、一緒に連れて行くか。
「無峰、この近くに町はあるか？」
「少し待っくださいな～。
此処から北西に5キロの場所にあるみたい。
名前は海鳴ですね～。」
「わかった。
取り敢えず、其処に向かうか。」
チャクラで体を強化する。
「瞬間の術。」
俺はネコを抱えて移動した。

うちはミズチ転生記２（前書き）

＞リニスｓｉｄｅ＜

うちはミズチが転生して、“リリカルなのは”の世界に現れた丁度その頃。

一匹の山猫が森の中を必死に走っていた。

彼女の名はリニス。

リニスはＳランクであり、トップレベルの使い魔だった。

本来ならば、リニスは自分の主、プレシアとの契約を果たし、そのまま消えるはずだった。

しかし、彼女は消える前日、主の部屋でとある計画書を見てつけてしまった。

そこには、主の娘であり、自分にとっても娘同然の教え子フェイトの名前と輸送船の襲撃計画、ジュエルシードと言うロストロギアの名が書かれていた。

リニスはプレシアにフェイトに何をさせる気なのか問い詰めた。

しかし、プレシアには、はぐらかされてしまい、契約により、リニスは消されそうになった。

しかし、直前でプレシアの気が変わった。

プレシアは、リニスが自分の娘の偽物であるフェイトの事で度々、主である自分に反抗してきたのを思いだした。

最後にそれをリニスに訂正するように言ったが、リニスは断固聞き入れなかった。

プレシアはふと考えた。

ただ普通に消すのは面白くない。

ならば、反抗したのを後悔させながら消してやろうと思った。

取り敢えず、彼女はフェイトを痛めつけるのに使っていたムチを使ってリニスを痛めつけた。

1時間、2時間、3時間と時間が経つにつれ、プレシアはムチを魔法で強化したりした。

「きゃ
あうっ
ひっ
あっ
あうっ」

拷問部屋ではリニスの悲鳴とムチの音が響き続けた。

プレシアは時々、ムチを止め、今までの反抗に対しての謝罪を求めてくるが、断固としてリニスは折れなかった

なぜなら、彼女にとってプレシアに謝罪することは、プレシアがフェイトへ行っている虐待を認めることになるからだ。

リニスはなにをされても、それだけは絶対に認めたくなかった。

リニスの体はムチで叩かれ続け、所々出血していた。

暫くして、リニスは痛みにより、気絶してしまった。

いい加減、プレシアも一向に屈服しないリニス飽きたのか、転送の準備に入った。

最終的にプレシアは管理外世界の森にリニスを捨てる事にした。

リニスを捨て、それと同時に移動の途中、他の世界で捕まえてきた肉食獣を放した。

使い魔の契約を切られ、拷問を受けぼろぼろのリニスには、ほんの少しの魔力しかなく、只の山猫とかわりなかった。

しかも、体には未だにプレシアの拷問による痛みが走っている。

治療しようにも魔力がない。

それでも、リニスは肉食獣から逃げるため、自分の体に鞭を打って走り出した。

しかし、リニスは段々と追い詰められていった。

プレシアはリニスが必死に逃げる姿を見て満足したのか帰って行ったようだ。

リニスはフェイトの事もあって、まだ消える訳にはいかなかった。

その時、森に大きな音が響きわたった。

リニスは肉食獣が音に気をとられている内に隠れた。

音がしたと言うことは誰かがこの森にいるかもしれない。

彼女は肉食獣から隠れながら、自分に残っている力を振り絞って、辺りに念話を送った。

数分後、右側の茂みが動いた。

リニスは、希望を持って、僅かに顔を音がした茂みに向けた。

しかし其処には、絶望が待っていた。

其処にはさっきまで自分を追っていた肉食獣がいたのだった。

肉食獣は鋭い目を光らせ、口からだらだらと涎を滴ながら、ゆっくりとリニスに近づいてくる。

リニスは必死に逃ようとしたが、足は今までの疲労と拷問の痛みと肉食獣に対しての恐怖でもう動かなかった。

もう、打つ手がなかった。
プレシアに契約を切られ、無力で何もできない自分。
ゆっくりと、だが確実に自分に近づいてくる肉食獣。
時間がとてもゆっくり感じられた。
頑張ってプレシアの拷問にも耐えたのに・・・。
私は。
ここで終わりなのかな。
ムダな努力だったのかな。
そう思うと、リニスの目から涙が溢れだしてきた。
「うっ、うっ、うっ。」
涙は次から次へと溢れてくる。
何時もの、真面目で優しく、責任感が強い彼女からは想像出来ない様な儚い姿だった。
しかし、無情にも肉食獣はどんどん距離を縮めてくる。
視界は涙でぼやけていたが、リニスには肉食獣がもう目の前にいるのがわかってしまっていた。
肉食獣もう腕を振り上げいる。

リニスは泣きながら助けを求めた。

「っ・・・誰か・・誰か・助けてぇぇぇ！！」

次の瞬間リニスにとって、理解出来ない事が起こった。

目の前の空間が突然歪み、肉食獣が消えたのだ。

そしての小さく痛みを堪える声が聞こえた。

「ミズチ様っ」

「俺は大丈夫だ。

それよりも」

次の瞬間リニスは抱き抱えられた。

その腕は優しく、暖かく感じられ無性にリニスは安心した。

「ありが・・とう・・。」

リニスは、意識を手放した。

うちはミズチ転生記2

＞リニスｓｉｄｅ＜

うちはミズチが転生して、“リリカルなのは”の世界に現れた丁度その頃。

一匹の山猫が森の中を必死に走っていた。

彼女の名はリニス。

リニスはＳランクであり、トップレベルの使い魔だった。

本来ならば、リニスは自分の主、プレシアとの契約を果たし、そのまま消えるはずだった。

しかし、彼女は消える前日、主の部屋でとある計画書を見てつけてしまった。

そこには、主の娘であり、自分にとっても娘同然の教え子フェイトの名前と輸送船の襲撃計画、ジュエルシードと言うロストロギアの名が書かれていた。

リニスはプレシアにフェイトに何をさせる気なのか問い詰めた。

しかし、プレシアには、はぐらかされてしまい、契約により、リニスは消されそうになった。

しかし、直前でプレシアの気が変わった。

プレシアは、リニスが自分の娘の偽物であるフェイトの事で度々、主である自分に反抗してきたのを思いだした。

最後にそれをリニスに訂正するように言ったが、リニスは断固聞き入れなかった。

プレシアはふと考えた。

ただ普通に消すのは面白くない。

ならば、反抗したのを後悔させながら消してやろうと思った。

取り敢えず、彼女はフェイトを痛めつけるのに使っていたムチを使ってリニスを痛めつけた。

1時間、2時間、3時間と時間が経つにつれ、プレシアはムチを魔法で強化したりした。

「きゃ
あうっ
ひっ
あっ
あうっ」

拷問部屋ではリニスの悲鳴とムチの音が響き続けた。

プレシアは時々、ムチを止め、今までの反抗に対しての謝罪を求め

てくるが、断固としてリニスは折れなかった

なぜなら、彼女にとってプレシアに謝罪することは、プレシアがフェイトへ行っている虐待を認めることになるからだ。

リニスはなにをされても、それだけは絶対に認めたくなかった。

リニスの体はムチで叩かれ続け、所々出血していた。

暫くして、リニスは痛みにより、気絶してしまった。

いい加減、プレシアも一向に屈服しないリニス飽きたのか、転送の準備に入った。

最終的にプレシアは管理外世界の森にリニスを捨てる事にした。

リニスを捨て、それと同時に移動の途中、他の世界で捕まえてきた肉食獣を放した。

使い魔の契約を切られ、拷問を受けぼろぼろのリニスには、ほんの少しの魔力しかなく、只の山猫とかわりなかった。

しかも、体には未だにプレシアの拷問による痛みが走っている。

治療しようにも魔力がない。

それでも、リニスは肉食獣から逃げるため、自分の体に鞭を打って走り出した。

しかし、リニスは段々と追い詰められていった。

プレシアはリニスが必死に逃げる姿を見て満足したのか帰って行ったようだ。

リニスはフェイトの事もあって、まだ消える訳にはいかなかった。

その時、森に大きな音が響きわたった。

リニスは肉食獣が音に気をとられている内に隠れた。

音がしたと言うことは誰かがこの森にいるかもしれない。

彼女は肉食獣から隠れながら、自分に残っている力を振り絞って、辺りに念話を送った。

数分後、右側の茂みが動いた。

リニスは、希望を持って、僅かに顔を音がした茂みに向けた。

しかし其処には、絶望が待っていた。

其処にはさっきまで自分を追っていた肉食獣がいたのだった。

肉食獣は鋭い目を光らせ、口からだらだらと涎を滴ながら、ゆっくりとリニスに近づいてくる。

リニスは必死に逃ようとしたが、足は今までの疲労と拷問の痛みと肉食獣に対しての恐怖でもう動かなかった。

もう、打つ手がなかった。
プレシアに契約を切られ、無力で何もできない自分。
ゆっくりと、だが確実に自分に近づいてくる肉食獣。
時間がとてもゆっくり感じられた。
頑張ってプレシアの拷問にも耐えたのに・・・。
私は。
ここで終わりなのかな。
ムダな努力だったのかな。
そう思うと、リニスの目から涙が溢れだしてきた。
「うっ、うっ、うっ。」
涙は次から次へと溢れてくる。
何時もの、真面目で優しく、責任感が強い彼女からは想像出来ない様な儚い姿だった。
しかし、無情にも肉食獣はどんどん距離を縮めてくる。
視界は涙でぼやけていたが、リニスには肉食獣がもう目の前にいるのがわかってしまっていた。

肉食獣もう腕を振り上げいる。

リニスは泣きながら助けを求めた。

「っ・・・誰か・・誰か・助けてぇぇぇ！！」

次の瞬間リニスにとって、理解出来ない事が起こった。

目の前の空間が突然歪み、肉食獣が消えたのだ。

そしての小さく痛みを堪える声が聞こえた。

「ミズチ様っ」

「俺は大丈夫だ。

それよりも」

次の瞬間リニスは抱き抱えられた。

その腕は優しく、暖かく感じられ無性にリニスは安心した。

「ありが・・とう・・。」

リニスは、意識を手放した。

うちはミズチ転生記３（前書き）

戦闘シーンはありません。
だらだらしてますが、気にしないだくれるとあらがたいです。

うちはミズチ転生記3

太陽が真上にくる頃、俺たちは町に着いた。

取り敢えず、コンビニに入りネコに巻くための包帯を買う。

因みに、お金は持ってないから写輪眼で催眠をかけた。

罪悪感があるが仕方ない。

次に、ネコを抱えながら今夜泊まる所を探す。

「無峰、この近くにホテルはあるか？」

「少し待って下さいね～。

ありましたよ～。

でも、お金は有るんですか？」

「まぁ、その点は大丈夫だよ。」

俺は無峰に案内されホテルに着いた。

かなり高級そうだ。

ネコを服の中に隠して正面玄関から入り、受付にいく。

「すみません。」

「はい。」

受付の人がこっちを見たと同時に目を合わせる。
「当ホテルをご予約された方でございますか？」
「はい。
うちはという者ですが・・・」
「はい。
お待ちしておりました。
うちは様。
お部屋は９５１号室です。
係員がお部屋までご案内しいたますのでお待ちください。」
「いえ。
自分で行きますので。」
「かしこまりました。
これがお部屋の鍵です
よい、休暇をお過ごしください。」
「ありがとう。」
俺はエレベーターで９階にいき、９５１号室に入る。
部屋に入り、ネコを服の中から出してベッドに寝かせた所で無峰が聞いてきた。
「ミズチ様～。
何時の間に予約なんてしたんですか？」

「いや、予約なんてしてないよ。」
「ならどうやって・・・。
もしかして・・・。」
どうやら、無峰は気づいたらしい。
「あぁ。
受付の人に写輪眼で催眠をかけた。」
「なるほど～。
あくどいですね～。」
「さてと。
もう一仕事するかな。」
俺は部屋から出てエレベーターで最上階に上がる。
「ミズチ様、何処へいくんですか？」
「まぁ、お楽しみだ。
変化の術。」
一応、俺は変化の術で３０才位の係員に変装した。
普通の服を着た１３才の子供が１人て最上階なんて彷徨いたら速攻で捕まる。
最上階に着いたと同時に、エレベーターに金持ちそうな小太りした客が入ってきた。

探す手間が省けたぜ。
その人の肩を叩く。
「お客様。」
「んっ。
なんだね。」
その人と目が合った瞬間、写輪眼を使い、催眠をかける。
内容は９５１号室を１ヶ月間うちはミズチの名で予約してお金を全額前払いする事。
因みに、朝夕２食付きで。
催眠にかかったのを確認して部屋に戻る。
部屋では、まだネコは寝ていた。
「ミズチ様～。
答えを教えてくださいよ～。」
「わかったよ。」
俺は無峰に全てを教えると無峰は俺に言ってきた。
「あは～。
ミズチ様って本当にチートキャラですね～。」

チートってなんだ？

聞きたいけど聞いちゃいけない気がする。

ちなみに、これは生活の知恵だぞ。

昔、任務中にやったら扉間にバレて散々説教されたがな・・・。

扉間の奴、元気かな～。昔を思い出して余韻に浸っていると無峰が聞いてきた。

「これからどうするんですか～？」

「取り敢えず、町を見てみるかな・・・。

影分身の術。」

俺は部屋に影分身に来る途中コンビニで買った包帯をネコに巻くように指示して町に出た。

「元の世界と違い平和だな。」

ついそんな言葉が口からでてしまう。

元の世界では、俺は5才の時から戦場に出ていた。

しかし、今目の前にいる子供は明らかに戦争をしらない目をしている。

見渡せば、町はカップルや家族で賑わっている。

つい考えてしまった。

もし、自分が初めからこの世界に産まれていたら・・・。

自分が家族と平和に暮らしていたら・・・。

「ミズチ様～。

大丈夫ですか？」

無峰の声で我に帰った。

今更悔やんでも遅いのにな・・・。

「すまんな、無峰。

少し考え事をしていた。

何の話をだっけ。」

「お昼ご飯の話ですよ～。

ちゃんと無峰の話、聞いてください。

でないと、無峰は怒っちゃいますよっ。」

「今更思ったが、無峰って結構喋るタイプだな。

デバイスってみんなそうなのか？」

「いえ。

ここまで喋るのは無峰くらいですね～。

因みに、他のデバイスが無口な理由は・・・。
みんなが坊やだからです！！。」

・・・

場が一気にしらけた。

無峰は恐らく、ガンダムの登場人物“赤い彗星”シャアのセリフ、
「坊やだからさ。」
をパクったんだろう。

神がくれた知識の中に何故かあったからな。

他にも
「ＭＳの性能の違いが戦力の決定的差ではない事を教えてやる！！」
とか
「敢えて言おう！！
カスであると！！！」
などがあった。

いつか言ってみたい言葉だな。

でも、俺だって瞬身の術を使ったら、３倍以上の速さで動けるぞ。

「ところで・・・。」

話を変えようとしたら、無峰が急に怒りだした。

「ミズチ様、普通に流しましたね！！。
なんだか、無峰のせいでしらけたみたいじゃないですか！！。

無峰のせいにするなんて・・・・。
無峰は怒ってますよ！！。」
何故か無峰に怒られた・・・・。
「す、すまんな。」
「まぁ、いいですよ。
無峰がお喋りなのは神様のせいなんですよ。
無峰は贋作なんですよ。」
「どういうこと？」
「神様は無峰を作る時にＡＩを育てるのに苦労していたらしいんです。
その時に、偶々他の神様が近くでゲームをやっていたらしいんですよ。
そしてその神様が
「自分が攻略？している女の子性格を元にして作ればいいんじゃないのか？」
といってきたらしいです。
神様は悩んだらしいんですけど、時間がなくそれを採用したと。
だから、無峰の性格はゲームのキャラクターが元になってるんです。
所詮、無峰は贋作なんですよ。」
「だが、無峰は無峰だぞ。
贋作なんかじゃないと俺は思う。」
「どういうことですか？
ミズチ様。」

「たとえ無峰が誰かを元に作られても、今この瞬間、この場所で自分の意思で俺と話しているのは無峰自身だ。
それに俺が今、話しているのはゲームのキャラクターなんかじゃない。
俺は無峰自身と話している。
それに無峰は自分の意思で応えてくれている。
これはあくまで持論だけどね・・・。」

俺は暫く間を置いて言った。

「俺の友が言った言葉がある。
「俺たちは戦う為の人形なんかじゃない。
戦う事でしか自分を表現出きなかったが・・・。
何時も自分の意志で戦ってきた。」
表現の仕方や考えている事が同じでも、自分の意志は個人個人で違うものだ。
たとえ、体が全て同じ存在がいたとしても・・・自分の意志、心が少しでも違うだけで、それはもう完全に別人だ。
偽物ではなく、単に似ているだけの存在だ。
だから、俺はこの世に贋作なんて物は存在しないと思う。」

暫くお互いに何も喋らない静かな時間が流れた。

「あは～。
驚きましたね。

今のは、無峰からミズチ様への好感度がかなり上がりましたよ～。
ありがとうございます。
ミズチ様。
ミズチ様の言う通りですね。
無峰は無峰自身でした～。」
どうやら、無峰は吹っ切れた様だな。

「しかし、神にもいろんな奴がいるんだな。というか神がゲームなんてしていていいのか？」

「その神様はよく、神の世界を抜け出して、エロゲーを買いに行ったり、「萌え～」とか叫んびながらアニメを見ているらしいですよ～。
縁があれば何処かで会うかもしれませんね～。」

そう話ながら町を歩いていると子供が大人に絡まれているのを見つけた。

流石に、見たからには、ほっとけないな。

「すみませんっ。
ごめんなさい。」

女の子は必死に男に誤っている。

「あぁん。
すまんで済んだらな。
警察はいらんのじゃい。
大人しく、俺と来いや。」

どうやら、男は当たり屋で茶髪の子は当ってしまった側ようだ。
俺は男に近寄って、肩を叩いた。
「すみません。」
「なんじゃい。
今大事な話をしとるんや。
部外者は引っ込ん」
男と目が合った瞬間、写輪眼を発動させ相手に幻術をかけた。
（瞳術・地獄鏡写。）
「もう、いいじゃないか。
謝っているんだし。
許してあげようよ。」
「うわぁ。
なんだお前は！！
ば、化け物ー。」
「はい？
いきなり人を化け物扱いですか？
酷いなー。」
「ひぃー。
周りも化け物だらけに。
どうなってるんだ？
だ、誰か、助けてくれー。」

男にかけた幻術は瞳術・地獄鏡写。
名前の通り、かかった相手に相手が心の中で思っている地獄のイメージを現実の様に見せる幻術。
どうやら、周りの全ての人が化け物に見えているようだ。
映画か何かの影響か？
「ヒィー。
こ、殺されるー。」
男はダッシュで逃げて行ってしまった。
子供は唖然としている。
そりゃそうだ。
さっきまで話していた相手が突然狂乱して走り去ってしまえば、誰でも驚くだろう。
とりあえず、女の子に話かけるか。
「君。
大丈夫だったかい？」
「は、はい。
ありがとうございます。」
「いやいや、大したことはしてないよ。」

「あっ。
な、何かお礼を。」
「いやいや。
いらな」
そこでお腹がグゥ～と鳴った。
「あっ、もしかしてお昼ご飯まだなんですか？」
「うん。
忘れていたな。」
お昼どころか朝から飲まず食わずで、しかも走りまわったからな～。
「なら、私の家に来て下さい。
私の家、喫茶店なんです。」
「でも、迷惑じゃないか？」
「いいえ。
むしろ、来てほしいです。
それに、いろいろお話しとかしたいですし。」
「そう言えば自己紹介がまだだったな。
俺の名は、うちはミズチだ。」
「私の名前は高町なのはです。」

軽く頭を撫でると嬉しそうにしてくれた。

和むな～。

「よろしくな。」

「はい。」

これが後々に白い悪魔と呼ばれる子との出会いだとはこの時は思ってもなかった。

リニスside

夢を見ていた。

私がプレシア、フェイト、アルフとお茶をする夢。

私たちは他愛のない会話をするだけ。

でも、みんなが笑っていた。

幸せでした。

すると突然プレシア、フェイト、アルフは立ち上がった。

そして彼女たちは何処かに歩き出してしまった。

私は必死に皆を追った距離はどんどん離れていく。

「行かないで！！
プレシア。
フェイト。
アルフっ。」

叫んだ後、気づいたら周りは白くふかふかでした。

まるで、柔らかい白い布に覆われているみたい。

なんとか体をねじって抜け出すと目の前に知らない男の子がいました。

「むっ
起きたか？」

男の子は私に近寄ってきた。

そして、私の目の前に蓋の空いた猫缶を差し出した。

匂いをかいでみる。

いい匂いですね。

「遠慮はいらない。
食べてみなよ。」

試しに食べてみると美味しかった。

私は夢中で猫缶を食べた。

食べ終わった後、少し経ってから私は思いだした。
プレシアの計画、拷問、その後捨てられ、獣に食べられそうになった。
もうだめだと思った。
諦めかけたその時、男の子が助けてくれた。
そうだ。
さっきの男の子はあの時の最後に私を抱き上げた人てすね。
体を見ると所々包帯がしてある。
彼が巻いてくれたみたいですね。
私はお礼に彼の所に行って頬擦りした。
今の私にできるのは頬擦りくらいですから。
すると、彼は私をまた抱き上げて撫でてくれた。
温かくて優しい手。私は確信しました。
私を助けてくれたのはこの人ですね。
魔力を計測してみるとＡＡくらいある。

この人だったらプレシアを止めてくれるかもしれない。
私は念話で話しかけてみることにした。
（聞こえますか？
聞こえたら返事をしてください。）
「むっ。
誰だ？
俺の頭に話しかけてくるのは？」
（私です。
貴方の足元にいます。）
男の子は私を一瞥した後、また、私を抱き上げた。
「君が話しているのか？」
（はい。
実は折り入ってお願いしたい事が・・・。）
「そういう事なら、ちょっと待ってくれ。
今、本体を呼ぶから。」
そう言うと彼はいきなり消えてしまった。
私は驚いて周りを見回したが、彼はどこにもいなかった。
少し寂しいけど、あの人が言った通り、待つしかないですね。

それまで、私の魔力がもつといいんですけど・・・。

そして、彼が消えてから数分後、部屋のドアが開いて消えた彼が入ってきました。

うちはミズチ転生記４（前書き）

誤字、脱字、漢字の間違いは可能な限り除きました

戦闘シーンはそろそろ書くつもりです

うちはミズチ転生記４

俺は今、なのはと彼女の家である喫茶店でご飯を食べている。
因みに、呼び捨てなのは、本人からの希望だ。

「へぇー。
じゃあもしかして、ミズチさんは外国の人？」
「うん。
今ちょっとした用事で日本に来ているんだ。」
「どんな用事なの？」
「それは流石になのはにも教えられないな。」
「そうなの。」
「悪いね。
それにしてもこの喫茶店、ケーキが凄く美味しいな。
流石、なのはの家。」
「にゃはは。
そう言われると照れるなー。」
「でも、本当に美味しいぞ。
俺、ここの常連になりそうだもん。」

そこで若い女の店員が会話に入ってきた。
「ありがとう。
でも、そこまで言われると流石に恥ずかしいわね。」
「もしかして、なのはのお姉さんですか？」
すると、彼女はニヤケて嬉しそうにいった。
「違うわよ～。
私はなのはの母親よ～。」
「へぇー。
随分と若いんですね。」
実際、母親にしてはかなり若く見える。
「そう見えるぅ～？」
「はい。
パーティーに出たら引く手数多でしょうね。
夫の方が羨ましい限りです。」
「ありがとう。
まだ子供なのにお世辞が上手いわね～。」
「いえ。
本当の事ですよ。」
「ふふっ。

ありがとう。
そんな君にこれはサービスよ。」
そう言うと、なのはのお母さんはテーブルにシュークリームを置いて、厨房に戻っていった。
食べてみるとかなりうまかった。
元の世界では味わえないうまさだな。
その後、なのはといろんな話をしていると急に知識が流れ込んできた。
なるほど、ネコが目覚めたか。
影分身は解除すると本体に経験と精神的疲労が流れ込んでくる仕組みになっている。
だから、潜入任務や修行に使い勝手がいい。
そろそろホテルに戻るかな。
「ごめん、なのは。
そろそろ帰らないと。」
「えー。
まだ帰らないでよ。
私、もっとミズチさんとお話してたいのに。」
「すまんな。」

そう言ってなのはの頭を撫でてやる。

「じゃあ、今度一緒に遊んで！！
約束だよ。」

「わかった。」

「あとね・・・。
その・・・。」

「何だ？」

「ミズチ兄ちゃんって呼んでもいい？」

そう聞いた瞬間、厨房の方から殺気がした。

しかし、ミズチ兄ちゃんか・・・。

響きがいいな。

元の世界では「ミズチ様」とか俺の通り名である「神童」とか呼ばれていた分、新鮮な感じがする。

弟子であるシズクまでミズチ様って呼んできやがる。

もっと砕けた感じでよかったのにな・・・。

流石に、扉間や同じ部隊の忍からは呼び捨てにされていたけど

みんな元気かな・・・。
懐かしんでると、急になのはが悲しいそうな顔になった。
「やっぱりダメ？」
「いや、別にいいぞ。
むしろ、そう呼んでくれるとうれしいな。」
そう言った瞬間、また殺気がした。
この喫茶店の厨房は怖いな・・・。
一体何がいるんだか。
「ありがとね。
ミズチ兄ちゃん。」
「じゃあな、なのは。」
そう言って、なのはたちと別れ、帰ろうとした。
すると、店の入り口でなのはのお母さんに呼び止められた。
「さっき、言いそびれたけど・・・。
なのはを助けてくれてありがとね。」
「いえいえ。
それにしても、この喫茶店の厨房には何かいるんですか？
スゴい殺気が・・・。」

「あれは気にしないでくれるとうれしいな。」
なのはのお母さんは若干引きつらせながら言ってきた。
「そうですか・・・。
わかりました。
また来ます。
えっと。」
「桃子よ。
高町桃子。」
「俺はうちはミズチです。
では、さようなら桃子さん。」
俺は桃子さんと別れ、瞬身の術で急いでホテルに戻った。

部屋に戻ってみるとネコが待っていた。
影分身によると頼みがあるらしい。
「初めてましてかな。」
(どういう事ですか?
私はさっき貴方と話しましたよ?)

「それは・・・」

俺はネコに影分身の仕組みを教えた。

（なるほど・・・。
便利な術ですね。
確かに、それなら初めましてですね・・・。
私はリニス。
使い魔です。）

「俺の名はうちはミズチだ。
ヨロシクな。」

「私は無峰ですよ～。
分類上はインテリジェントデバイスですね。
よろしくお願いしますね～。」

ネコは少し驚き身構えながら聞いてきた。

（まさか、あなたは管理局員ですか？）

また知らない単語が出たな。

管理局か・・・。

名前からして何かを管理する組織だろう。

「いや、違うと思う。
第一、管理局ってなんだ？
初めて聞いたぞ。」

（・・・。
本当ですか？）

「はい～。
ミズチ様は管理局とは何も接点はありませんよ～。」

無峰は管理局がなんだか知ってるみたいだ。
まぁ、知ったかぶりかも知れないが・・・。

（少し驚きました。
管理局員じゃないのにデバイスをお持ちなんですね。）

「あぁ。
一応な。
それで頼みとはなんだ？」

（はい。
取り敢えず、私の身の上話を聞いてもらえますか？）

「うん。
聞くよ。」

（ありがとうございます。
実は・・・）

リニスは自分とプレシア、フェイトとの関係、プレシアがフェイトを使って何かを計画している、などを話してきた。

「なるほどな。
それでお願いとは？」

（はい。
実は貴方にわたしと契約してほしいんです。
私は今のままだと数分後にはただのネコに戻ってしまいます。私は
プレシアを止めて、フェイトを助けたいんです。
私にできる事ならなんでもします。
だからお願いします。）

リニスは俺に必死に頼んでくる。

関わってしまったからにはひくわけにはいかないな。

それに、俺が見捨てたらこの子は消えてしまうし。

「わかった。
君と契約するよ。」

（ほ、本当ですか！！）

「あぁ。
ただし、条件がある。」

ネコは身構えて聞いてきた。

（なんでしょうか？）

「俺より先に絶対に死なない事。
それだけは守ってくれ。」

リニスは少し困惑していた。
でも、俺にとっては重要な事だ。
（わかりました。
ありがとうございます。
ところで・・・。
紙とペンはありますか？）
俺が部屋の机の中に入っていた裏が白い地図と黒いペンをリニスに渡した。
リニスはそこに何か書き出そうとしている。
おそらく、契約に必要なものなんだろう。
でも、流石にネコの手では上手く描けないようだ。
ペン先がプルプル震えている。
「俺が代わりに描こうか？」
（す、すみません。
本来なら魔力で表示するんですが・・・。
今は魔力があまりなくて・・・。
お願いします。）
俺はリニスの指示に従って陣を描き始めた。

「でも、使い魔と契約するなら魔力がいるだろ。
俺に魔力なんてあるのか？」

（はい。
見たところ、ありますよ。あ、そこはまっすぐに。）

「わかった・・・。
だいたい、どれくらいあるんだ？」

（そうですね。
ランクでいうとＡＡあたりってところでしょうか。）

「なるほど・・・。
よし。
次は？」

（これで終わりです。）

俺は陣を描き終えた。

自分的に、なかなかの出来具合だ。

（では、魔方陣に入ってください。）

「わかった。」

俺は念のため、無峰を机の上において、魔方陣を床に敷いて中に入った。

するとリニスも魔方陣の中に入ってきた。

（少し待ってくださいね。）

すると、リニス＞ネコ＜は光だした。

そして、光が収まると綺麗な女がいた。

「お前、リニスか？」

「はい。

残りの魔力が少ないため、人の姿になると2、3分位しかもたないんです。

だから、急ぎましょう。」

「わかった。」

「では、目を瞑ってください。」

俺は目を瞑った。

少し経った後、口に柔らかい何かがあたった。

どうやら、リニスは俺とキスをしている様だ。

契約に必要なんだろうな・・・。

そう思っていると机の上に置いてあった無峰が騒ぎ出した。

「あは～。

ミズチ様の唇がぁ～。

けっこうディープなものですね～。
もしかしらこのまま情事に発展するかもしれないですね～。
無峰には全然アリだと思いますよ～。
ミズチ様、寧ろ功めるべきでは？」

無峰のアホな発言を黙らせようと目を開ける。

「あ、あの・・・。
ごめんなさい。
本当は儀式魔法でするんですけど・・・。
その・・・。
魔力がなくて・・・。」

リニスの顔を見ると、うなじまで真っ赤だ。

無峰の発言がかなり効いたらしい。

しかし、そこでやっと俺は気づいた。

これは驚いたな・・・。

無峰が情事がどうのこうのと言うわけだ。

リニスはまさかの全裸。

俺はついつい無関心に言ってしまった。

「ちょっとまて、リニス。
お前、全裸だぞ。」

「へっ？
きゃあぁ！！！」

リニスは自分が全裸なのに気づた瞬間、体を両手で必死に隠しながらその場にしゃがみ込んでしまった。

使い魔にも羞恥心はあるらしい。

やはり、口寄せ動物とは違うな～。

しかし、改めてリニスを見るとかなり可愛い。

そんな事を考えながら、気まずくなった俺はバスルームに行った。

予想通りバスローブがあったので、それをとってリニスに渡してやった。

「取り敢えずこれを着てくれ。」

「は、はいっ。
あ、ありがとう、ございます。
あと。
その・・・。
で、できれば・・・。
うしろを向いていてくれませんか？」

リニスは顔を真っ赤にして涙目でしゃがみ込んだ体制から俺にお願いしてくる。

しかも要所を隠しているとはいえ全裸で・・・。

これは不味いぞ。
性欲を持て余すな・・・。
さらには、頭からはネコミミが出て激しくピクピク動いているし、
腰の下辺りからはしっぽが出ていて先端は背中のあたりをゆらゆら
散歩している。

俺のライバルであり友だった扉間や堅物な火影・柱間様、師であっ
たうちはマダラでさえ、これにはノックアウトだろうな。

角都には性欲があるか知らんからなんとも言えんが。

「わ、わかった。」

俺は速攻で後ろを向いた。

しばらくするとリニスが許可をだしてきた。

「もういいですよ。
すみませんでした。」

「いやいや。
こっちこそ、無関心に言ってすまんな。」

振り向くとバスローブ姿のリニスがいた。

顔はまだほんのり赤い。

恥ずかしいためか、若干俯いている。

それでも、リニスのネコミミは自己主張するようにピクピク動き、
しっぽゆらゆら動いて先端は膝の辺りをうろついている。
しっぽを触りたくなるのは、きっと俺だけではないだろうな～。
しかも、改めてみるとあれだな・・・。
肩がすごく凝りそうなものを抱えているな。
そう考えているとリニスが話し掛けてきた。
「あの・・・。
そんなに見られると・・・。
少し恥ずかしいので・・・。
その・・・。」
しまったな。
さすがに見すぎたか。
「すまんな、リニス
あんまりにリニスがカワイイから見惚れてしまった。」
すると、リニスは恥ずかしがりながらに言ってきた。
「あ、ありがとうございます。
カワイイと言われたのは初めてですね・・・。」
「現に俺から見たらかなりカワイイぞ。」

そう言いながら頭を撫でてやると、リニスは気持ちよさそうにした。

すると、部屋がノックされた。

おそらく、料理が来たんだろう。

ドアの所に行き、開けると案の定係員がワゴンに料理を載せて持ってきていた。

「お食事をお持ちしました。」

「適当に並べて下さい。」

「畏まりました。」

係員はリニスを見た時、一瞬驚いたがそのまま料理を机の上に並べた後、去って行った。

リニスを見ると何で驚いたのかやっとわかった。

ネコミミを頭につけた綺麗な女がバスローブ姿でいたら誰でも驚くな。

「よし、取り敢えず食事にするか。」

「はい。」

俺とリニスは椅子に座り、料理に手をつけようとすると、リニスが注意してきた。

「イケませんよ、マスター。
いただきますがまだです。」

どうやら、リニスはかなりしっかりした性格らしい。

「すまんな。
いただきます。」

「いただきます。」

俺とリニスは食事を開始した。

うちはミズチ転生記５（前書き）

後半、うざいやつが出てくるのであしからず。
因みにそいつはとある人柱力の姿を借りているためその口調になっています。

次は多分戦闘があると思います

うちはミズチ転生記5

「違いますよ、マスター。
フォークはこう持ってください。」

「・・・。
なぁ、リニス。
これじゃあ、飯なんて食べれないよ。
別に持ち方なんてどうでもいいだろ。」

「ダメですよ、マスター！！
主を正すのも使い魔の役割ですから。
では、次はフォークの使い方を。」

俺は飯を食い始めた直後、リニスに注意されまくった。

今も修正されている。

これじゃあ何時までも飯が食べれん。

「頼むから今日は見逃してくれ。
このままだと時間がかかりすぎる。」

リニスは困った顔になった。

「困りましたね。
マスターに礼儀作法をかんぺきに教えたかったんですが・・・。」

リニスはしばらく考えた後、あきらめたように言った。

「仕方ありませんね。
では、残りは夕食後に。」
前言撤回。
あきらめてなかった。
「勘弁してくれ。」
と言いたい所だが、口にだすとまたリニスに説教されるため止めた。
「わかった。
取り敢えず、食べよう。
係員が回収しに来るから。」
リニスは仕方なそうに頷き食べ始めたため、俺も食事を開始した。
ショックな事に
「いただきます」
を言ってから３０分経っていた。
食事が終わった後、リニスと現時点でわかっている事を整理してみた。
リニスによると、ジュエルシードと呼ばれる物と恐らくそれを運搬船する船が関わってくるらしい。
「運搬船の襲撃計画があるくらいだからプレシアはジュエルシードが狙いで奪取したらそれを使って何かするのだろう。」

「えぇ。
恐らくは。」

「襲撃計画がまだ完成してないのを聞いた感じ、計画実行までである程度時間は残されているはずだな。
その間に対策をねるか。」

「そうですね。」

ここで1つ気になった。

「リニス。
お前、プレシアに勝てるのか？」

リニスは悔しそうな顔をした。

「私は元はプレシアにつくられた使い魔です。
恐らく勝てないかと。」

となると選択肢は2つ。

俺がプレシアを止める。

もしくは、外部からプレシア以上の実力者の助力を得て、止める。

取り敢えず、プレシアの実力を知らないとな。

そう考えているとリニスが真剣な表情で聞いてきた。

「マスター。

聞きたいことが。」

「なんだ？」

「マスターが使用していた影分身というものは魔法なんですか？
私は聞いたことがないので・・・」

そういうば、リニスに俺が転生者であること言うの忘れてたな。

「リニス。
今から言う話は真実だ。
しっかり聞いてくれ。」

そして、俺はリニスに自身が他の世界で死んだ事。
神によって転生した事を話した。

話し終えるとリニスは目を見開いて驚いていた。

「そんなことが・・・。
それに神なんて・・・。」
当然の反応だな。

すると、さっきまで黙っていた無峰が口出ししてきた。

「あは～。
実際、ほんとですよ～。
因みに、私は神に作られたデバイスですね～。」

「だったら、その神様に」

「後、神は基本的に世界に手出しは出来ないらしい。
だから、神に頼るのはムリだからな。」

「そうですか・・・。」

リニスは残念そうにうつむいた。

いや、待てよ。

確か、転生する前、常識を頭に入れられたあと・・・。

「後、向こうに着いて暇になったら、天に祈れ。
私から直々に指示を与えてやるからの。」
って言われたはず。

今やってみるか。

「リニス。
俺は今からやることがある。
だから、俺が言った事を頭の中で整理しておいてくれ。
聞きたい事は無峰に聞いてくれ。」

そう言って無峰をリニスに渡す。

そして、他の部屋に移動し、目を閉じて祈ってみる。

すると、周りが光った気がした。

目を開けると辺りが白い空間にいた。

「ほっほっほっ。
ようやく来たか。」
後ろを振り向くとじいさんがいた。
「先に言っておくがこの姿はワシではないぞ。
ほれ。」
そう言った瞬間じいさんは扉間の姿になった。
「俺、本来の姿は貴様に見せる事はできん。
そう言う決まりだからな。」
口調も声も扉間のに変わりやがった。
そして、次の瞬間またじいさんの姿に戻った。
流石に驚いたな。
「所で何の用かの。
指示が欲しいのか？」
「いや、聞きたい事がある。
プレシア・テスタロッサ、フェイト・テスタロッサ、ジュエルシードに関する事件がいつ起きるかわかるか？」
神はニヤリと笑って言った。
「わかるが聞いてどうする？」

俺は神にリニスの事を話した。
すると、神は意外そうに言った。
「お主が何故そやつを助ける。
放っておけばよかろう。」
「何故かはわからない。
でも、助けたいと思った。少しでも、リニスの力になりたいと思っていた。
幻術返しはもうすでにやった。
この気持ちは催眠ではない。
俺の本心だ。
だから俺はリニスを助けたい。」
俺は自分の本心を神に言った。
すると神はニヤリと笑った。
「ほっほっほっ。
いい答えじゃ。
単に面白そうだからとか邪な事を考えていたら嘘を言ってやろうと思っとったのにの。」
心が読めるのかよ。
流石は神だな。
だが、今ので自分の気持ちを再確認できたな。

「詳しく言う事はできぬが代々の日程は教えてやろう。
事件が起きるのは3年後じゃ。
因みに、それまでジュエルシードについて調べても何も出て来こんはずじゃぞ。」

「なら、なんでプレシアは知ってるんだ？」

「それはワシにも解らんのじゃ。
しかし、その事実を逆に取ると・・・。」

ま、まさか・・・。

「察したようじゃな。
ワシら神の誰かがプレシアに教えたかもしれないとなる。」

「そんな事をするような神がいるのか？」

「神も一枚岩ではない。
ゲームに熱中する神も居れば、世界に終焉をもたらそうとする輩も居る。
しかし、皆、直接手出しは出来ぬ。
故に現地の人間を使う訳じゃ。」

成る程、理にかなってはいる。

「じゃから十分に気を付けよ。」

「わかった。」

「因みに、情報の対価じゃが・・・・。」

「対価がいるのかよ！！」

「神は皆に平等じゃ。
さっきのプレシアも恐らくは対価を払ったはず。
恐らくは断片とはいえ未来の情報。
しかし、その者が元から関わって居るし、詳しくは教えておらんだろうから対価も低いじゃろう。
まぁ対価は情報を渡した神によるじゃろうがな。」

成る程な。

「それで俺の対価はなんだ？」

「人助けじゃ。」

拍子抜けしたな・・・。

「流石に、無理なのは止めろよ。
俺はあんたと違い歴とした人間だからな。」

「まぁ、お主の力を持ってすれば容易いじゃろう。
場所は紙に書いてバックに入れておく。
それと、１つ道しるべをくれてやる。
いい答えを聞いた礼じゃ。」

すると周りがまた白く光出した。

「そろそろ時間じゃな。

1ヶ月間は交信出来んじゃろ。
頑張れよ。」

「ありがとな。」

すると気づいたら周りが元のホテルに戻っていた。

神side

「行ったかの。」

俺はアイツに結構期待してるのかもな。

「ヘイ!!
どうだった?
ブラザー!!」

「賭けは僕たちの勝ちですか?」

騒がしい奴らが来たな・・・。

「いや。
純粋に助けたいらしい。
心からそう言っておったわ」

「なら僕たちの敗けですね。

もしかして、彼はリニスに惚れたんですか？」

「そこまでは我々でも立ち入ってはいかんじゃろ。」

神にもプライバシーは必要だからな。

「今んとこ、好事ぃ。
でも後事はわからない。
ウィィィー！！」

「君は早めに仕事にもどったら？
ダジャレ野郎。」

「ダジャレじゃねェ！！
オシャレなライムじゃ、このやろう！！
アッ、ウェァー！！」

「いい加減、そのふざけたラップ辞めたほうがいいよ。
耳障りだから。」

「なんだとぅ！！
バカヤロ、コノヤロー！！」

まぁ、道しるべを上手く使えるか・・・。

良くも悪くも未来はそこで決まるな・・・。

「無視するなんて虫がよすぎだぜ！！
ウィィィーー！！」

・・・。

ウザいな。

「では、僕は行きますよ。
今は翡翠ちゃんを攻略中ですので・・・。
まだ、秋葉ちゃんも攻略しないといけませんし。」

「あぁ。
そうだな。
ワシも仕事に戻る。
賭けに負けた分しっかり働けよ。」

「帰ったらぁ仕事にしごかれるぅ！！
イェァーー。」

次の瞬間、白く空間から3人が消えた。

うちはミズチ転生記６（前書き）

戦闘シーンをやっと書けましたが難しいですね。

誤字、脱字等があるかもしれません。

うちはミズチ転生記６

神のじいさんの所から戻った後、神に言われた通りバックを見てみると研究所の地図と小さな箱、白い服が入っていた。

恐らくは神が言っていた道しるべは小箱の方だろう。

服は見た感じリニス用だ。

研究所の地図を確認すると、人助けと言っていた理由がよくわかった。

この研究所は、人体実験をしているようだ。

子供の監禁場所と書いてある場所がある。

早めに潰したほうがいいな。

そう思いながら、小箱を開けると、紙が一枚入っていた。

何も書いてない白紙の紙。

どこが道しるべなんだ？

その答えを考えながらリニスのいる部屋に向かった。

部屋に入るとリニスは水を飲んでいた。

「リニス後でこれに着替えろ。」

「これは私がプレシアの所で着ていた服・・・。
マスター、この服どうしたんですか？」
「神のじいさんからお前への贈り物だ。」
服を受け取るとリニスは真剣な顔になって言ってきた。
「マスター。
聞いておきたい事があるんですが・・・。」
「なんだ？」
「マスターはどのくらい強いんですか？」
俺の実力か・・・。
扉間と同程度くらいだが、どう言おうか。
「恐らく、木の葉の里では三番手くらいかな。
だが、こっちの基準ではわからんな。」
「では、明日私と模擬戦をしましょう。
私もマスターの実力を知っておきたいですし。」
「わかった。
今日はもうそろそろ寝るか。」
そう言って寝室にリニスとむかったら、なんとベッドが1つしかなかった。

「リニス。
おまえがベッドを使え。
俺は床で寝るから。」

「そんな！！
マスターがベッドを使ってください！！
マスターが床で寝てるのに使い魔である私がベッドを使うなんて私には絶対にできません！！」

その後、リニスと言い争った結果、２人でベッドを使う事にした。

しかし、いざベッドに入ってみると全く寝むれない。
なんたって自分の背中越しで女が寝てる。

しかも、髪からはいいにおいがする。

さらにバスローブからはみ出したしっぽらしきものがモゾモゾと動いていて、チョンと俺の背中を触っては、引っ込みを繰り返している。

結局その日は余り寝むれなかった。

次の日、目が覚めた事から察するに少しは眠れた様だ。

恐らくは１時間位だろうが忍にとっては十分だ。

むしろ、任務中だったら寝ることなんて許されないからな・・・。
隣を見てみるとリニスがまだすやすやと寝ていた。
軽く頭を撫でてやると嬉しそうに頭を押し付けてきた。
時計は5時を指している。
俺が早すぎたか・・・。
リニスを起こさない様にベッドから出て、リビングに行き昨日もらった地図を見る。
第３６管理世界か・・・。
恐らくはこの世界ではないのだろう。
初めに無峰にこの場所の名を聞いた時、第７９管理外世界と言っていた。
これには、暫くは手出し出来ないな。
俺は例の小箱を取り出し中の紙を出した。
やはり、ただの紙だな。
だが、どこかで見た気もする。
そう考えていると、気配がした。

リニスが起きたかな。

「おはよう、リニス。」

「おはようございます、マスター。
マスターは朝が早いんですね。」

「まぁ、忍だからな・・・。」

忍は基本的に少ない睡眠時間で行動できるように訓練されている。
理由は任務中だと睡眠不足は死につながるかも知れないからだ。

「そう言えば、今日は模擬戦だったな。」

「はい。
わかってます。」

「では、食事にするか。」

俺たちは朝食食べた後、リニスに初めて出会った森にきた。

「リニス、お前結界とか張れるか?」

「はい。
マスターは？」
「俺はまだ魔法は使えないよ。」
「そうでしたね。
では私が。」
そう言ってリニスは辺りに結界を張りに行った。
「マスター、影分身は使ってはイケませんよ。」
「わかった、わかった。」
まぁ、とりあえず、挨拶代わりに驚かせてみるかな。

リニスside
私はその場に封時結界を張ってマスターの方を見た。
あれ？
一瞬マスターの目が赤く見えた気がしたのですが・・・。
気のせいだったようですね。
まだ、マスターはバリアジャケットを知らないため私は今回バリア

ジャケットを使わないと決めました。

それに、マスターの影分身を禁止したからには私もバインドを控えないと公平ではありませんね。

無峰をよると、マスターは影分身以外にも様々な術が使えるとの事。

気を付けなけれ・・・

そう考えた時にはすでに遅かった。

「リニス、これは警告な。」

いきなり背後から肩を軽く叩かれ、マスターの声がした。

私は反射的に後ろをを見るとマスターがそこで微笑んでいました。

いつの間に私の背後に・・・。

流石、マスターですね。

やはり、ただ者ではありませんね。

マスターがさっきまでいた所を見ると、マスターはいなかったため、影分身ではないようです。

私は今のでだいたいのマスターの実力が解ってしまった。

恐らくは私ではマスター勝つことは難しいでしょう。

でも、マスターには私の力を知っておいて貰いたいですね。

「そろそろやるかな。」

マスターは私から距離をとった。

「行きますよ、マスター。」

「来い、リニス。」

私は先手をとってフォトンバレットをマスターに射った。

「土遁・土流壁!!」

マスターが目にも止まらぬ速さで印を結び地面に手をついた瞬間、地面が凄い勢いで盛り上がって壁を作あげました。

マスターはそれを盾にしてフォトンバレットを防ぐと、壁の上側に行き、軽く反りがえりました。

「いくぞ!!
水遁・爆水衝波!!」

次の瞬間マスターが凄い量の水を吐き出しました。

まるで滝が目の前にあるようですね。

私は飛行魔法で回避し、マスターを見るとマスターはどうやったのか、水の上に立っていました。

「水遁・鉄砲玉。」

マスターが私に向かってかなり速い水の塊を吐いてくる。

私はギリギリでそれを回避し、フォトンバレットをマスターに射ちました。

しかし、マスターはそれをさっきと同じ水の塊を吐き出して相殺させました。

私のフォトンバレットと同程度の威力とは・・・。

術とは凄まじいですね。

「これはどうする？
水遁・水牙弾の術！！」

マスターの足元の水が凄い勢いで回転しながら私に向かって伸びてくる。

これは避けれそうにありません。

「っ。
ラウンドシールド！！」

私は咄嗟にシールドでそれを防ぎました。

くっ、やはりすごい威力ですね。

ピシッ、ピキピキ

やはり、
シールドが持ちそうにありません。

私は用意しておいた発射体からフォトンランサーを水の柱にぶつけてなんとか軌道を逸らした。

あと少し遅かったらシールドが破られていたでしょう。

次はこっちからいきますよ、マスター。

「マスター、これならどうです！！」

私はフォトンスフィアを２０基生成して様々な方向からフォトンランサーでマスターを狙いうった。

「水遁・水陣壁！！」

マスターが印を結んだ瞬間マスターの周りの水が盛り上がり、壁を作りました。

フォトンランサーは水の壁に当たって防がれてしまいました。

「水遁・水鋭槍！！」

マスターの周りの空中に水が６個浮きあがり、槍を型どった。

私もフォトンスフィアを同じ数生成する。

「ふん。」

「はぁ。」

お互いにそれを発射させて空中で相殺させる。

水の槍とフォトンランサーは相殺されて視界を覆うほどの水しぶきが上がった。

やはりマスターは転生する前にかなりの戦闘経験があるみたいですね・・・。

しかし、私が魔法を使う度に何故か疲労感がしますね。

魔法の威力に問題はありませんが・・・。

魔法を使う度に体が疲れていっているみたいです。

そう考えていると、マスターが水しぶきを突破してきた。

接近戦に持ち込むつもりの様ですね。

受けてたちましょう。

私も両手に魔力を纏いマスターに突っ込んでいく。

するといきなり目の前からマスターが消えた。

ソニックムーブより早い！！

次の瞬間、右側から蹴りがとんできた。

私はそれをギリギリで避けてマスターに魔力を込めた拳でパンチを打ちました。

それに対し、マスターは拳を避けて、私のふところに入りこむと、そのまま足払いをしてきた。

私はそれを横に飛び込みようにして、なんとか避けました。

それに対して、マスターは足払いをした勢いを殺さずに、そのまま私にパンチを打ってきた。

私はその拳をいなし、左手に右手の分も魔力をこめてマスターのお腹にカウンター気味に拳を入れようとしました。

しかし、マスターは大きくジャンプしながら私の肩を掴み空中で私に左足で回し蹴りをしてきました。

私はギリギリで蹴りを止めて足を掴み、投げ飛ばそうとしました。

「くっ。」

しかし、私が逆に投げ飛ばされました。

どうやらマスターは投げ飛ばされる途中、空中で私の服を掴み強引に体勢を変えて私の後ろに回り込み、掴んでいる私の服を力強いひいて私を投げ飛ばしたようですね。

なんとか飛行魔法で体勢を立て直すとマスターが追撃をしてきました。

私の直前で一瞬止まり、右肩が後ろに傾いた。
右のパンチですね。
私はそれを受け流し、カウンターを決めようとしたが、マスターは寸前で体勢を変えて左足の蹴りをしてきた。
私は蹴りをなんとか受けようとした。
「うっ。」
しかし、急に背中にスゴい衝撃が走った。
まるで何かが勢いよくぶつかったみたい。
「かはっ。」
そして、ふらついた所にマスターの蹴りが私のお腹に入った。
気を失いそうになったが、なんとか意識を保ってマスターから距離をとった。
やはり、マスターは強いですね。
「はぁ、はぁ、はぁ。
マスター、さっきのは・・・。
一体・・・？」
「背中の奴か？
あれはお前を投げ飛ばして追撃しにいく間に印を結んでおいて水の

槍を作りお前に当てつつ、腹に蹴りを入れただけだ。」

簡単にいっているが、私には印を結んでいたのが全く判らなかった。

さっきの体術といい、戦闘中の判断といい、熟練の戦闘者にしかできない動きだ。

どうやら、マスターは天才の部類に入る人間ですね。

無峰が言っていた元の世界でマスターが神童と呼ばれていたこと。

その理由が判りました。

類い希な格闘センス、多彩な忍術、圧倒的な戦闘経験、頭も鋭く、魔力もかなりもっている。

しかも本人は魔法をまだ扱えていないしまだかなり若い。

それにマスターを見ると全く疲れが見えない。

我が主ながら、恐ろしい人ですね。

しかし、私の魔力も体もそろそろ限界ですね・・。

体中がずきずき痛みます。

やはり、プレシアに契約を解除されマスターと契約してからは、魔法の感覚がおかしいですね。

体力的に次が最後の魔法になりそうですね。

「マスター。
私の体力がそろそろ限界なので、次で終わらせましょう。」
私は言いながら魔力を振り絞って魔方陣を展開していく。
「よし、わかったよ。」
マスターも高速で印を結ぶ。
「マスター、これが今の私の全力です！！」
私は自分の最大限の魔力を込める。
マスターの背後を見るとスゴい量の水が渦巻いている。
「撃ち抜け、轟雷！！
サンダースマッシャー！！！！」
「水遁・水龍弾の術！！」
私の魔方陣から稲妻が放たれ、マスターの水で出来た龍と激しくぶつかった。
スゴい水しぶきです。
今の私は魔法を多様するのは止めた方がいいですね。
プレシアを止めるためには魔法があまり使えない分、何かで補わなければ・・・。

そう問題点を考えながら私は気を失った。

うちはミズチ転生記７（前書き）

気づいたらｐｖが５万越えてました。

ありがとうございます。

なんとか書き終えました。

もう少しで第一期が開始できると思います。

うちはミズチ転生記7

ミズチｓｉｄｅ

どうやらリニスは結界をはり終えた様だ。

少し、遊ぶためリニスに写輪眼で幻術をかけてリニスの背後に回り込む。

そして、リニスの肩を叩いて幻術を解いた。

「リニス、これは警告な。」

リニスはすぐに振り返って俺を見て驚いていた。

まぁ、イタズラは成功かな。

「そろそろやるかな。」

俺はリニスから距離をとって構えた。

さて、魔法使いの力を見せてもらおうか。

「行きますよ、マスター。」

「来い、リニス。」

リニスはいきなり高速の射撃魔法を射ってきた。

「土遁・土流壁！！」

俺はそれをとっさに土流壁で防いだ。

火遁は下手するとリニスに火傷を負わせちゃうかもしれないし、雷遁は苦手だから水遁でいくかな。

とりあえず、水を用意するか。

俺は壁の上側に跳んで、チャクラを大量に練って口で水に変換して吐き出した。

「水遁・爆水衝波！！」

一応、辺りは水で満たされた。

リニスは飛行魔法で飛んでいる。

魔法ってのは飛べるのかよ！！

便利だな～。

ならば・・・。

「水遁・鉄砲玉。」

俺は鉄砲玉をリニスに放った。

リニスはそれを回避して、さっきのかなり速い射撃魔法を俺に放っ

てくる。

俺はそれを鉄砲玉で相殺した。

なかなかやるな・・・。

「これはどうする？
水遁・水牙弾！！」

水牙弾は威力を抑えてあるとはいえ、かなりの威力とスピードがある術だ。

リニスは避けきれないと判断したのか、シールド生み出し、それで防いだ。

だが、シールドぐらいでは俺の水牙弾は防げんぞ。

リニスはシールドが破られそうになり、とっさに射撃魔法を水牙弾にぶつけて軌道をずらした。

やはり、リニスは結構強いな。

「マスター、これならどうです！！」

そう考えているとリニスが射撃魔法を大量に色々な方向から射ってきた。

これは避けきれないな。

そう思いながら印を結ぶ。

「水遁・水陣壁！！」

俺は自分の周り３６０。に水陣壁を作りそれを防いだ。

今度はこっちから攻めてみるか・・・。

「水遁・水鋭槍！！」

俺は自分の周りに水鋭槍を作り、待機させた。

リニスを見ると、同じ数発射体を作っていた。

「ふん。」

「はぁ。」

お互い同じ瞬間に発射して水鋭槍は相殺され、かなりの水しぶきが上がった。

水鋭槍の先端部は丸くして威力も弱めてあるにしても相殺するとは・・・。

まあいいか。

これを利用して接近戦に持ち込むかな。

「瞬身の術。」

俺はチャクラで体を強化して、水しぶきの中に突っ込んだ。

水しぶきを越えるとリニスが待ち構えていた。

右から行くかな。

俺は瞬身の術で強化した足をフルに使いリニスの右側に回り込んで蹴りを放った。

リニスはそれに寸前で気づき避けてパンチを打ってきた。

俺はそれを避けてリニスのふところに入って足払いをしたがリニスは横に飛び込んで避けた。

俺は足払いの勢いを敢えて殺さず、拳に勢いをのせて打った。

リニスはそれを右手でいなし、左手でパンチを打ってきた。

俺はジャンプしながらリニスの肩を掴み空中でリニスに回し蹴りを放った。

だが、リニスはそれを受け止め、足を掴んで投げ飛ばそうとしてきた。

流石だな・・・。

リニスは接近戦もかなりできるな。

基本的に相手からの攻撃を避けつつ、隙があればカウンターを狙うタイプだな。

俺はそう考えながらリニスに感心した。

だが、まだまだ甘い。

俺は投げられる途中に、リニスの首の後ろの服を掴み、強引に体勢を変えてリニスの背後に着地した。

そして、その着地した勢いを利用して掴んでいる服を起点にして、リニスを投げ飛ばした。

さらに、リニスに追撃をするため走りつつ、水鋭槍の印を高速で結ぶ。

リニスの目の前で一瞬止まって水鋭槍をリニスの背後に作り、フェイントに右肩を引いた。

そして左足でリニスに蹴りを放つと同時に作った水鋭槍をリニスの背中に当てた。

「うっ。」

リニスは水鋭槍に気づかず完全に背中にヒットして体勢がぐらついた所で俺の蹴りが腹に入った。

「かはっ。」

これで終わりかと思ったがリニスはなんとか意識を保ったようだ。

大したやつだな。

しかし、もう限界だろう。
リニスは一旦俺から距離をとるがふらふらしている。

「はぁ、はぁ、はぁ。
マスター、さっきのは・・・。
一体・・・？」

「背中の奴か？
あれはお前を投げ飛ばして追撃しにいく間に印を結んでおいて水の槍を作った。
そして、それをお前に当てつつ、腹に蹴りを入れた。」

リニスに説明してやるとリニスは言ってきた。

「マスター。
私はそろそろ限界なので、次で終わらせましょう。」
リニスの前に魔方陣が現れた。

「よし、わかった。」

俺も水龍弾の印を結ぶ。

扉間が得意だった水遁系の上位忍術だ。

「マスター、これが今の私の全力です。」

リニスの方は準備が出来たようだ。

俺も印を結び終わって背後で大量の水が動めいている。

「撃ち抜け、轟雷！！
サンダースマッシャー！！！！」
「水遁・水龍弾の術！！」
リニスの魔法陣から稲妻が放たれ、俺の水龍弾と激しくぶつかった。
威力は互角の様だ。
そして、水しぶきがおさまるとリニスがふらふらして倒れた。
俺はとっさにリニスに抱き抱えた。
ギリギリだったな。
リニスはかなり強かった。
クラスで言うと上忍と中忍の間くらいかな。
刺し違え覚悟なら、角都の命１つくらいは削れる実力はある。
まぁ、アイツは、自分の心臓以外に心臓を４つまでストックできるし、その心臓が１つ１つ独立して動かせる反則なやつだからな。
だから、角都と戦うとなると必然的に５対１になるから俺でも本気で万華鏡まで使わないと勝てない。
それにしても早く魔法を覚えて空を飛んでみたいな。
そう思いながらリニスを抱えて移動した。

そして、移動中に休息にいい場所を見つけた。
俺は戦闘した場所から2ｋｍほど離れた場所で止まった。
そこは既に森を抜けていて、小さい草原みたいな所だ。
リニスを草の上に寝かせて俺もその場に座り、リニスの頭を撫でる。
こうしてリニスを撫でていると弟子のうちはシズクを思い出す。
あの子は術の才能もあったし心も優しい子だったな・・・。
確か、うちはには珍しい水の性質変化が得意で逆に火は苦手だった。

＞ミズチの死の5年前＜
＞木の葉の里＜

「あ～。
今回の任務、疲れたな。
よし、任務後の一杯行くか！！」
「貴様は任務後はそればかりだな。

たまには飲む以外の事を考えんか。」

「無駄ですよ、扉間様。
ミズチはどんな任務の後でも、飲みに行くんですからね。」

「そうぜよ。
しかも、誰かがついて行かないとミズチは朝まで飲むぜよ。
そして次の日、二日酔いの状態なのに任務にくるぜよ。
俺は任務中にいきなり吐くのだけは勘弁して欲しいぜよ！！」

「まったく。
任務中に吐くなどと・・・。
貴様という奴は・・・。」

その日、俺は自分の部隊の守野カエデ、うちはバキ、共に任務に行った火影様の弟、千手扉間と飲みに行く途中だった。

あの頃の俺は任務以外に目がいかず、任務後のお酒だけが楽しみだった。

まだ俺は未成年だったけど・・・。

先手とうちはが停戦して6年。

ライバルだった扉間とは親友になり、俺は上忍で部隊長をやっていた。
しかし、火影の争いに負けてしまった師匠のうちはマダラは里を抜けてしまった。

止めようと俺は単独で説得に向かったが、師匠は俺の言葉に耳を貸

さず、逆に里を共に抜けるように言ってきた。

そして、俺は師匠と戦闘した。

結果は俺の敗北。

俺はその日以降、任務に明け暮れた。

任務後はお酒を毎回飲んでいて、隊の仲間や扉間に毎日心配をかけていた。

だが、俺にはその時、他に打ち込める物がなかった。

扉間たちと話ながら飲み屋に向かう途中、通りかかったうちはの里の池の所で、俺は1人の少女がしゃがんでるのを見た。

なんとなく気になったが、俺は扉間たちとそのまま飲みに行った。

その日は余り酔えず、あいつらと解散して、家に向かっている帰り道。

行きの池に通りかかった。

そして、俺は行きに見かけた少女を思い出した。

そっと池を見てみると少女はまだそこにいた。

俺は流石に心配になり、近寄って声をかけた。

「君、どうかしたの？」

少女は振り返った。
将来美人に成りそうな顔立ちの少女の目は涙で濡れで真っ赤になっていた。
「あ、貴方様は神童様。」
「俺を知ってるのか？」
「わ、私もうちは一族なので・・・・。」
「成る程な。
名はなんて言うんだ？」
「シ、シズク。
うちはシズクでひゅ。」
おもいっきり噛んだな・・・・。
そこで俺はシズクに聞いてみた。
「なんで泣いていたんだ？」
聞いてみると少女はまた泣き出してしまった。
俺はどうすればいいんだ？
「とりあえず、泣きやんでくれ。
話ぐらいなら聞くからさ。」

そう言って頭を撫でてやると、数分後ようやく少女は泣き止んだ。

「でなんで泣いたんだ？」

「バカにされたんです・・・。

一族のみんなから・・・。

私、火の性質変化が苦手で・・・。

水が得意だから・・・。」

成る程な。

確かにうちはは火の性質変化が得意な一族だ。

現に、俺も火が苦手な奴に会ったのは初めてだ。

それが火が苦手で、火を打ち消す水が得意ならイジメられるかもしれんな。

「そうか・・・。

だがな、シズク・・・。

水の何が悪いんだ？」

「えっ？」

少女は驚いた顔をした。

「いったい水の何がいけないんだ？

俺だって水は得意だぞ。

それに火影様の弟の扉間だって水遁が主流の戦いをするぞ。」

そして、俺は１つ閃いた。

「お前、俺の弟子にならないか？」

うちはミズチ転生記7（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

リニスの性質変化はやっぱり雷でしょうか。

悩み所ですね。

うちはミズチ転生記８（前書き）

土曜投稿と言っておきながらの日曜投稿。

申し訳ありません。

作者が書き間に合いませんでした。

うちはミズチ転生記８

＞ミズチの過去＜

俺はシズクに
「弟子にならないか」
と聞いた。

「そんな！！
神童様の弟子なんて。
だめです。
私みたいな落ちこぼれを」

「誰が何と言おうと俺が決めた事だ。
俺は木の葉の神童、うちはミズチだぞ。
例え一族から疎まれても俺はお前の側にいてやる。
俺は約束は絶対に破らない。
だから、安心しろ。」

するとシズクは泣いて抱きついてきた。

「あ、ありがとうございます。
神童様。」

「あっ、そうだ！！
俺を師事するにあたって注意事項がある。」

「な、なんですか？
私、神童様の言うことなら何でも・・・・。」
シズクはどもりながら聞いてきた。
「俺を神童様って呼ぶな。
ミズチと呼び捨てにしてくれ。
それだけだ。
」
シズクはいきなり反論してきた。
「ダメです！！
それは絶対にダメです。
私の憧れのミズチ様をそのような・・・・。」
「本人が良いって言ってるからいいんだよ！！
それに俺に憧れてたの？」
「そ、そんな事より絶対に呼べません！！
そんな風に呼ぶくらいなら死んだほうがましです！！
私、池に飛び込みますよ！！」
その後、口論の末ミズチ様に決定した。
呼び捨てで良かったのに・・・・。
その後、火影様に頼み込んでシズクを俺の隊に入れてもらい、暇な時はシズクの水遁の特訓をした。

当初、扉間やバキ、カエデは相当驚いていた。

扉間なんて

「貴様、本当にミズチか？」

と疑われ水牢の術に閉じ込められたくらいだ。

あの時はマジで死にかけたな。

そして、次第にバキやカエデはシズクを妹のように可愛がり、武器の使い方や医療忍術を教え始めた。

水遁に関しては覚えがよすぎる。

扉間ですら感心していた。

そして、何故か修行の後や任務で役に立つと

「ミ、ミズチ様・・・。

頭を撫でください。」

と毎回俺の所にくる。

バキやカエデはそのたびに苦笑いをしていた。

ある時は俺の恋人のうちはレミナに2股と勘違いされて大変だったな。

レミナの瞳術は相手の脳内に己の意思を潜り込ませ操る瞳術だった。

レミナは俺がシズクの頭を撫でている所を見た瞬間ぶちギレた。

あの時ほどレミナに恐怖心を覚えた事はない。

レミナは自分の周りにいた忍を片っ端から洗脳し、そいつらと共に俺たちに襲いかかってきた。

あの時のレミナの無表情は今でも忘れない。

レミナを止めるために火影様自ら出撃して木遁忍術まで使ってたからな・・・。

そしてレミナはあの任務中に・・・。

そう思うと俺は後悔でいっぱいになった。

あの時、俺にもっと力があればレミナもカエデもバキも父上や母上も・・・。

死なずにすんだのに・・・。

そう思うと周りあの時の光景だった。

辺りはクナイや刀が散らばっていて血生臭い匂いが漂っている。

周りには木の葉の仲間や敵の岩隠れの忍の死体。

父上や母上、バキやカエデの死体もある。

そして、あの光景になった。

レミナが敵の忍の土流槍を食らって倒れた。
俺は土流槍を放った奴に天照をくらわしてレミナに駆け寄った。

「レミナ！！
大丈夫か！！」

「ゴホッ、ゴホッ。
ミ、ミッくん。
私・・・。」

レミナは口から大量の血を吐いた。

「レミナ！！
もうすぐ増援がくる！！
だからがんばれ！！」

すると、レミナは俺の額に手を触れて笑った。

「ミッくん。
私、しあわせだったよ・・・。
すっごく・・しあわせだった・・・。
グッ、ゴホッ。」

レミナはまた血を吐いた。

「しゃべるな、レミナ！！
まだ助かるから！！」
それでも、レミナは話し続ける。
「忍は自分を・・・偽らなきゃ・・いけない。
任務だと・・子供でも・・殺さなきゃいけない。
忍になった時から・・・私は・・いつも・・・自分を偽わってきた。
感情を・・・殺してきた・・・・。
一族のため・・里のために・・・。
いつの間にか・・・私は・・心を・感情を・・・失った・・・。
でもね・・・。
私・・ミッくんのまえだとね・・・。
しぜんと・・・失ったはずの・素の・・自分をだせたの。
どんなじごくを・・・見ても・・・里にかえれば・・・。
ミッくんが・・優しく・・頭を・・・撫でてくれる。
それだけで・・・。
いまだけは・・・自分を・・・だまさなくって・・・いいんだって・

・・・。

そんなふうに・・・思えた。

うれし・・・かった。

失った・・感情を・・・・おもい・・だせた・・・・・。

ぜんぶ・ミッくん・・・・おかげだよ・・・。

ありが・・とう・・・・。

好き・・・だよ・・・・。

ミッ・く・・ん・・・・・」レミナの手は俺の頭から滑り落ちた。

俺は自分の手見る。

血だ。

血で真っ赤に染まっていた。

その時だけは万華鏡で視力が減ってるはずなのにとても鮮明に見えた・・・・。

レミナを見る。

血で真っ赤だ。

腹からは土の槍がでている。そのまわりからまだドクドクと血がでている。

だんだん周りが暗くなってきた。

遠くから扉間の声が聞こえた気がする。

増援が来てくれたのか。

そう思い、俺の意識は途切れた。

「マスター！！
起きて下さい！！
マスター！！」

「うっ。
リ、リニスか。」

どうやら俺は昔の夢を見ていたらしい。

リニスが起こしてくれたようだ。

そして、夢で見たあの光景の性か服が汗でびしょ濡れだ。

「凄くうなされていましたよ！！

大丈夫ですか？
マスター！！」

リニスは真剣に聞いてくる。

よく見ると目が少し赤く、涙目だ。

とりあえず、リニスを安心させないと・・・。

「あ、ああ。
大丈夫だ。」

しかし、シズクとレミナの夢をみるとは・・・。

シズク、俺が死んでから自分の性質変化の事でイジメられてないかな。

んっ？

性質変化？

そうだ。

確か修行の時、性質変化を調べる時に使用するのもチャクラの感応紙だったはず。

もしかして・・・。

俺は例の小箱を取り出して、中から紙を取り出して少しちぎって自分のチャクラを流しこんだ。

予想通りだ。
紙は勢いよく燃えだした。
この紙はチャクラの感応紙に違いないな。
だが、何故これが道しるべなんだ？
そこで俺はリニスを見た。
リニスは急に燃えた紙にびっくりしている。
そうか。
これはリニスのための物か。
リニスに忍術を教えるとなると、途中チャクラの感応紙は必須品となる。
しかし、こっちの世界にはチャクラを吸う木なんて多分ないだろう。
だから、神が俺にあの時渡したのか。
俺はリニスに聞いてみた。
「リニス、俺に忍術を教わる気はないか？」
リニスは驚いた様に聞いてきた。
「私でも忍術は使えるんですか？」

「もちろん。
ただし、修行は必要だけどな。」
リニスは決心したように言ってきた。
「マスター、私に忍術を教えて下さい。
何故かは解りませんが、今の私は魔法が扱いづらいんです。
魔法の威力は変わらないんですが、魔法を使う度に何故か疲労感が・・・。
ですからマスター。
お願いします。」

「あは～。
リニスの魔法の不具合はマスターが転生者だからだと無峰は思いますよ～。
1度死んでいるマスターと契約をしたんですから、何かあっても不思議じゃないですね～。」

「成る程な。
わかった。
だが、俺の修行はツラいぞ。」

「望むところです。」

それにプレシアだったか。
魔法使いと戦うなら飛行魔法は必須だな

「それなら、俺も飛行魔法を教えてくれないか？
魔法使いを相手にするなら必要だろ？」

「マスター。
私を、フェイトを助けるのを手伝ってくれるんですか？」

「もちろん。
俺は今はお前の主だ。
何でも頼ってくれ。
お前をほっとく訳にもいかないしな。」

「分かりました。
ありがとうございます。
マスターこそ、私の訓練は大変ですよ。」

こうして、俺たちはお互いに自分の技術を教え始めた。

リニスside

目が覚めた。

何かに頭を優しく撫でられています。

気持ちいいですね。

そっと見るとそれは手でした。

暖かく、優しい感じがします。
私にはすぐになんなのか解りました。
マスターの手ですね。
マスターを見ると寝ているようだ。
寝ながらでも人を撫でるなんて・・・。
きっとマスターの癖なんでしょう。
私は、マスターと契約で繋がっているため精神リンクによりマスターの心情がある程度分かります。
マスターからは穏やかな感情が流れてくる。
もしかしたら、転生する前の夢を見ているのかもしれないですね。
だとしたら、今起こすのは野暮でしょう。
それにマスターはまだ私を撫でてくれています。
前の主のプレシアは甘えられるタイプではありませんでしたし。
もう少し、このまま撫でて貰ってもバチはあたりませんよね。
そう想ってされるがままになっていると急にマスターから悲しい感情が流れてきました。

これは・・・・・後悔？

すると、急にマスターがうなされて初めました。

すぐに起き上がってマスターを見るとマスターはすごい汗をかきながらうなされ苦しんでいました。

「マスター！！
どうしたんですか？
大丈夫ですか！！」

マスターに声をかけるがマスターは全く起きない。

それどころか、体が震え初めました。

まるでマスターは何かに怯える様に震えている。

すると、マスターから恐怖の感情と共に悲惨な光景が私に流れ込んできました。
私は思わず、吐いてしまいそうになりました。

辺り一面、人がたくさん死んでいます。

悲殺傷設定のあるこの世界では見ることができない光景。

頭や体が半分なくなっている死体もあります。

一言で言い表すならば地獄。

怖い・・・・・・。

今すぐにここから逃げ出したい・・・・・・。

そう思うたびに私はさらに怖くなって動揺してしまい、思い出しました。

マスターに助けられる直前、獣に食べられそうになった時の恐怖を。

私の目から涙が出てきました。

「うぐっ。」

マスターがうめいた事で私は自分に帰り、状況を把握しました。

マスターを起こさないと。

あんな光景の夢を見続けりなんて本当に地獄です。

私は自分の涙を拭き、マスターの肩を激しく揺さぶりました。

「マスター！！
起きて下さい！！
マスター！！」

「はっ。」

マスターは起き上がって周りを確認しています。

私は心配になり、マスターに聞きました。

「凄くうなされていましたよ！！
大丈夫ですか？
マスター！！」

「あ、ああ。
大丈夫だ。」

よかった。

私は、スゴくほっとしました。

すると、マスターは何かを考え初めました。

そして、マスターはポケットから小箱を取り出して、中から紙を取り出して少しちぎりました。

すると、紙は勢いよく燃えだした。

私はついびっくりしていまいました。

すると、マスターは私を見てしばらく考えた後聞いてきました。

「リニス、忍術を教わる気はないか？」

「私でも忍術を使えるんですか？」

今の私は魔法の使い勝手が悪い。

それに模擬戦を見る限り忍術は魔法に劣らず強力でした。
フェイトを助けるため。
プレシアを止めるために私は今以上の力が欲しかった。
「もちろん。
ただし、修行は必要だけどな。」
私は決心して言いました。
「マスター、私に忍術を教えて下さい。
何故かは解りませんが、今の私は魔力が使いづらいんです。
魔法の威力は変わらないんですが、魔力の減りが早くて・・・。
ですからマスター。
お願いします。」
すると無峰が会話に入ってきました。
「あは～。
リニスの魔法の不具合はマスターが転生者だからだと無峰は思いますよ～。
1度死んでいるマスターと契約をしたんですから、何かあっても不思議じゃないですね～。」
成る程。
確かにマスターは転生者でしたね。
むしろ、この程度の不具合だけだと喜ぶべきでしょうか。

「成る程な。
わかった。
だが、俺の修行はツラいぞ。」
フェイトを助けるため。
元主のプレシアを止めるため。
「望むところです。」
すると、マスターは私に言ってきました。
「それなら、俺も飛行魔法を教えてくれないか？
魔法使いを相手にするなら必要だろ？」
「マスター。
私を、フェイトを助けるのを手伝ってくれるんですか？」
「もちろん。
俺はお前の主だ。
何でも頼ってくれ。
それに、お前をほっとく訳にもいかないしな。」
マスターは私と共にプレシアと戦ってくれるみたいです。
ありがとうございます、マスター。
私は元々フェイトの魔法の教師ために生み出された使い魔。

人に教えるのは十八番です。

「分かりました。

マスターこそ、私の訓練は大変ですよ。」

うちはミズチ転生記８（後書き）

しばらく投稿できないかもしれません。

うちはミズチ転生記９（前書き）

なんとか書き上げたした。
遅れがちですみません。

急いだから誤字、脱字があるかも・・・・・・

うちはミズチ転生記９

＞第５５管理外世界＜

リニスと俺の共同の修行が始まった。

ホテルはチェックアウトして現在は第５５管理外世界に来ている。

なるべく自然が多い所がいいとリニスに言ったら、転移させてくれた。

魔法万歳だな。

この世界は人が1人もいなくて自然が広がっている。

修行には最適だ。

とりあえず、俺はリニスにチャクラがなんであるかを説明した。

そしてある程度リニスが理解した所でチャクラを練る修行を開始した。

誰でも、初めは精神エネルギーと身体エネルギーを練りこむのに苦労する。

現にリニスは手を合わせてうなりながら頑張っている。

たまにリニスの体にチャクラを流込んで感覚を覚えさせる。

そして、俺はと言うと無峰を起動してバリアジャケットを設定中。
無峰は起動して今は刀になっている。
「ミズチ様～。
私の触り心地はいかかですか～。」
俺は無峰を軽く振り回して感触を確かめる。
「変な言い方するな。
だが凄いしっくりくる。
これなら大丈夫だろう。」
「あは～。
ありがとうございます。
バリアジャケットはどんな格好にしますか？」
昔の戦闘服でもいいが・・・。
あれは時代遅れな気がする。
「こんなのでどうですか？」
俺のバリアジャケットはうちはで訓練時に着ていた服に変わった。
背中にはうちはの家紋。
「無峰、どこでこれを・・・。」
「ふっ、ふっ、ふっ。
ミズチ様～。

無峰を侮ってはイケませんよ！！
私の中にはミズチ様の生前の様々な画像が神様によって入れられてますよ！！
なんと、お風呂に入っているシーンとかもあります！！」
ストーカーかよ。
「後で消しとけよ。」
「善処しま～す。」
「マスター。
もう一度チャクラを流してください。」
リニスが俺を呼んできた。
俺もそろそろ魔法を教えてもらうかな。
俺はリニスの方に向かった。
2週間後、ようやくリニスはチャクラを練れことが出来た。
「マスター！！
出来ましたよ！！
どうですか？」
リニスは俺の前に嬉しそうに走ってきて印を結んび、チャクラを練っている。
写輪眼でチャクラを確認したから確実だ。

「よくやったな、リニス。」
つい、シズクの時みたいにリニスの頭を撫でてしまった。
だが、リニスは嬉しそうにされるがままに撫でられている。
まあ、いいか～。
「マスターはどうですか？
飛行魔法は制御できましたか？」
「一応、飛べはするんだが、姿勢制御が難しいな。」
すると無峰が言ってきた。
「ミズチ様は元々は魔法のない世界からの転生者なので仕方ないですよ。
気長に頑張りましょう～。」
「そうですね。
ところでマスター。
私は次はなにを？」
「よし、リニスの次の修行は木登りだ。」
それを言うとリニスは少し呆れたように見てきた。
「マスター。
そんなの誰でも出来ますよ。」

「ただし、手を使うなよ。」
リニスは小首を傾げながら聞いてきた。
「どういう事ですか？」
「見せた方が早いかな」
俺は近くの木まで行って印を結んで木に向かって歩きだした。
そして木の幹に足を付けてチャクラで吸着し木を登っていく。
だいたい半分位登ったところでリニスを見るとリニスは驚いていた。
俺は重力に逆らいながらさらに歩いていき、木の頂上付近の枝にぶら下がった。
因みに、俺はこの逆さずりの状態をコウモリと呼んでいる。
「まぁ、こんな感じだな。
チャクラは使いようによってはこんなこともできる。
模擬戦の時、俺が水の上を走っていただろう。
あれもチャクラの応用だな。」
リニスは頷きながら言ってきた。
「解りました。
一応、聞きますがこの修行にはどんな意味が？」
リニスの問いは当然だろう。

手を使わずに木に登ったのは確かに凄い。
だが、それが忍術とどう関係しているのかは説明を聞くまで大抵の人はわからない。
現にシズクも初めは俺に聞いた。
「まぁ、聞いてくれ。
この修行は2つの目的がある。
まず、第1にチャクラのコントロールを身に付けるためだ。
人が忍術を使うにあたって最も肝心な事は精密なチャクラコントロールだ。
本来、術を使う時は練り上げたチャクラを必要な分だけ必要な箇所に集めなくてはならない。
それはわかるか？」
「はい。
でも、精密なコントロールはかなり難しいです。」
流石はリニスだ。
よく理解しているな。
「その通り。
この木登りの修行においては練り上げなくてはならないチャクラの量は極めて微量だ。

さらに、人体の中でも足の裏はチャクラを集めるのか最も難しい場所でもあるんだ。
つまりこの修行はチャクラの精密なコントロールを鍛える修行でもあるな。

ちなみに、チャクラがコントロールできれば大抵の術は扱える様になるぞ。」

するとリニスは目を輝かせて聞いてきた。

「では、マスターが使っていた影分身もですか？。」

影分身は日常生活でも使える便利な術の1つだ。

リニスも影分身が使いたい様だな・・・。

「あぁ。
使える様になるな。

そして2つ目の目的は、体の1部分に集めたチャクラを長時間維持する持続力を身に付けるためだ。」

「どういう事ですか？」

「チャクラコントロールができても、術に応じてバランスよく調節されたチャクラをそのままの状態で維持するのはかなり難しい。

さらに言うと、俺たちは忍は戦闘中にチャクラを練り上げる。でも、

戦闘中に止まる訳にはいかないから動きながらチャクラを練り上げなくてはならない。
そういう状況下でのチャクラの精密なコントロールと持続はさらに困難だ。

だからこそ、木に登りながらチャクラのコントロールして調節と持続のノウハウを掴む。

これが木登りの修行の目的だ。

意外に奥が深いだろ？」

俺はそう言うとチャクラを流すのを止めて地面に着地した。

「成る程。
確かに、奥が深いですね。
では私は早速やりますね」

リニスは木に走って行き、印を結んで木に足を付けて登ろうとした。

だが、練り上げたチャクラが強すぎたのか5歩目で木の表面から弾かれてしまった。

「くっ。

なかなか難しいですね。」

「じゃあ頑張れよ！！」

俺はそう言って自分の飛行魔法の練習をしにいった。

リニスに木登りの修行を教えてから1週間たった。
俺はある程度、飛行魔法も制御出来るようになっていた。
リニスはまだ木登りの修行が完成していないようだ。
俺はリニスにある程度飛行出来るようになった事を行った。
リニスはそれを聞くと俺を言ってきた。
「わかりました。
じゃあ、次の段階ですね。
マスター、一回自分の最大速度で飛行してみてください。」
俺は自分に出来る最大速度で飛行したがまだ遅い。
すると、リニスは飛行魔法を使用して高速で飛んでみせた。
「マスターにはこれくらいのスピードを出せる様にして欲しいです。
その為に修行をちょっとだけ変えてみましょう。」
そう言うとリニスは地面に着地した。
「マスター、今までの修行では姿勢制御に要点を置いていましたが、
今からは速さです。
とは言っても速く飛ぶためのコツは姿勢制御と魔力のコントロール

と慣れです。
なので、今から移動する時は常に飛行魔法を使用してください。」
成る程な。
確かに移動を全て飛行魔法でやっていたら、確実に飛ぶ事に慣れるだろう。
「わかった。
リニスの方は何か問題あるか？」
リニスは一瞬何か言おうとしたが止めた。
「いえ、ないです。
では、今日の食事調達の当番はマスターでしたね。
おいしいお魚をお願いしますね。」
リニスはかわいく言ってきた。
リニスはやっぱり元が山ネコなだけあって魚が好きみたいだな。
「了解。
じゃあ、今日もお互い頑張るか。」
俺は、近くの池に魚を捕りに魔法で飛びながら行った。
俺は今、湖の上を飛行魔法で飛びながら魚を探している。

普通なら水に潜って水遁で魚を捕るんだが今日からは空から探して、
フォトンバレットで仕留める事にした。
飛行魔法が失敗して落ちると池にどぼんだ。
だからある程度、危機感がでていい修行になるだろう。
「無峰、魚がいたぞ！！」
「はい、ミズチ様！！」

あれから不注意で2回位、池に落ちただろうか。
そろそろ休憩にするか。
俺はパンツになって服を干して休憩していた。
「マスター。
ちょっといいで・・・・・」
後ろを向くとリニスが顔を赤らめていた。
「マ、マスター
なっ、なんで裸なんですか！！」

「パンツは、はいてるぞ。」
「マスター！！
いいから服を来て下さい！！」
仕方ない。
俺は服が乾いているのを確認してから服を着た。
「どうしたんだ？」
「そ、その・・・。
やっぱりいいです！！
なんでもありません！！」
リニスは森の方に走って行ってしまった。
リニスの要件は代々わかる。
多分、修行の要点とかヒントの類いを聞きに来たんだろう。
俺も昔は師匠に聞きに行ったし、シズクの修行の時もアイツは聞きにきた。
結局、恥ずかしがって今のリニスみたいに止めてしまったが・・・。
俺も昔、経験したから判るがこういうコツを師匠や出来る人に聞くのは何故か恥ずかしい。
俺の修行の時も師匠が察してくれて、一人言を呟くように言ってく

れたのを思い出すな～。

仕方ない・・・。

俺はリニスの修行場所に向かった。

修行場所に着くとリニスは木の中腹辺りまで登っていた。

「おーい！！
リニスー。」

「へっ？
きゃあ！！」

リニスは俺に驚いて、バランスを崩して派手にずり落ちた。

「くっ、くっ、くっ。」

リニスがあんまり派手に落ちるからつい笑ってしまった。

リニスは恥ずかしそうにこっちをみて怒ってきた。

「マスター！！
笑わないでください！！
仕方ないじゃないですか！！
途中までは上手くいってましたよ！！」

リニスは頭についた土を払いながらこっちを睨んでくる。

俺に失敗を見られたのが、そうとう恥ずかしかったのか、顔が赤く

見える。

意外にカワイイ所があるな。

つい俺はそう思った。

「マスターこそ、飛行魔法が失敗して池に飛び込んでましたよね。マスターは人の事を言えないと思います！！」

リニスは笑われたのに対してかなりご立腹の様だ。

少し、からかい過ぎたかな・・・。

「痛いところをつくな。

でも、よく1人で真ん中までいけたな。

偉いぞ・・・。

リニス。」

俺はリニスに近づいて頭を撫でてやる。

「ひゃっ。」

「すまん。

つい、撫でてしまった。」

リニスがびくっとしたため頭を撫でるのを止めようとすると。

「ち、違います、マスター。

撫でられるのは嫌じゃないんです。

むしろ、もっと・・・・・・・・・。」

最後の言葉はよくわからなかったが撫でるのはいいらしい。

許可が出たため躊躇いなく撫でてやる。

リニスはされるがままになりながら言ってきた。

「あ、ありがとうございます。
マスター。」

「修行だが、真ん中より上にはなかなか行けないだろう？」

「はい。
そうなんです。」

「ならば、裏技を使うか・・・。」

うちは一族にしか出来ない裏技を・・・。

「裏技って一体なんですか？」

「その話の前に俺の目について説明させてくれ。」

リニスｓｉｄｅ

私は木登りの修行で行き詰まっていました。
チャクラ自体は何とか練れるようになりましたが、
精密なコントロールはまだ私には困難です。
私はその日の昼食用に前日にマスターが捕ってきた魚を焼いてを食べ終えた後、また修行を始めました。
修行を始めてから４日経ちました。
木の真ん中までしか行けず、私はマスターにコツを聞こうとしました。
しかし、何処か恥ずかしくてきけませんでした。
昔、フェイトに魔法を教えていた時、フェイトが恥ずかしがりながらコツを聞こうとしてきたのを思い出します。
フェイトの恥ずかしがってた理由がようやく判りました。
確かに、聞きに行くのは恥ずかしいですね。
それに、さっきマスターに聞きに行ったらマスターは裸でした。
私は思わず見とれてしまいました。
程よくついた筋肉がすごくカッコよかったです。
修行をしているとその姿を思い出してしまい、なかなか集中出来ま

せん。

ダメですね。

もっと集中しないと。

私は自分の頬っぺたをたたいて気合いをいれ、修行を再開しました。

そして、木の真ん中まで行った時、声が聞こえてきました。

「おーい！！
リニスー。」

「へっ？
きゃあ！！」

私はマスターに驚いて、バランスを崩し足が木に弾かれて派手にずり落ちてしまいました。

「くっ、くっ、くっ。」

マスターに笑われてしまった。

私は恥ずかしくてマスターを睨んで怒りました。

「マスター！！
笑わないでください！！
仕方ないじゃないですか！！
途中までは上手く行ってましたよ！！」

私は頭についた土を払いながらマスターを睨らみました。

「マスターこそ、飛行魔法失敗して池に飛び込んでましたよね。
マスターは人の事を言えないと思います」

「痛いところをつくな。
でも、よく1人で真ん中までいけたな。
偉いぞ、リニス！！」

マスターは私に近づいてきて頭を撫でてくれました。

「ひゃっ。」

私はつい、恥ずかしくて声をだしてしまいました。

「すまん。
つい撫でてしまった。」

マスターが勘違いをして頭を撫でるのを止めようとしたので私はつい言ってしまいました。

「ち、違います、マスター。
撫でられるのは・・・嫌じゃないんです。
むしろ、もっとなでてほしいです。」

本音が出てしまいましたがマスターには聞こえなかったみたいです。

マスターに頭を撫でられるのはとても気持ちいい。

前の主のプレシアは甘えられるタイプではありませんでした。
私も時々、誰かに甘えたかったんです。
今、その夢が叶ってマスターにやさしく撫でられてます。
「あ、ありがとうございます。
マスター。」
「修行だが、真ん中より上にはなかなか行けないだろう。」
「はい。
そうなんです。」
「ならば、裏技を使うか・・・・。」
裏技なんてあるんですか？
私はそう思いマスターに聞いた。
「裏技って一体なんですか？」
「その話の前に俺の目について説明させてくれ。」
するとマスターの目が赤くなった。
よく見ると勾玉の様な模様がある。
「マスター、一体その目は何ですか？
目に変な模様が・・・・。」

「この目は写輪眼と言う目だ。
俺の世界でもうちはと言う一族に伝わる特異体質であり、うちは一族が最強と称えられた由縁でもある。」

確か、マスターの名字はうちはでしたね。

「一体その目にどんな力があるんですか？」

「それはな・・・」

写輪眼について説明中

私はマスターから写輪眼の説明を聞き終えました。

「ではマスター、一般的に写輪眼は持ち主にずば抜けて高い動体視力を与える洞察眼、相手に幻術をかける幻術眼、相手に催眠をかける催眠眼などの力がある。
そして写輪眼の名の通り相手の体術、幻術、忍術を見抜きその技をコピー出来、人のチャクラを見分ける事が出来る。

そう言う事ですか？」

「あぁ、概ねあってるよ。」

マスターの目はすごいですね。

「成る程。
マスターはすごい目をお持ちなんですね・・・。」

「そして裏技だが、写輪眼でお前のチャクラを見て何処に偏っているか見てそれを直す。」

「わかりました。
じゃあ、チャクラを練りますね。」

ミズチｓｉｄｅ
＞第４９管理外世界＜

２ヶ月後、俺は１人で第４９管理世界にいた。

リニスは今、木登りの修行を終えて、分身の術や変化の術を覚えた。

今は水面歩行の修行にはげんでいる。

俺は、フォトンランサーを打て、飛行魔法も完璧に制御出来る様なり、転位魔法も覚えたため、ようやく神の頼み事を遂行できるようになった。

もう既に5、６件くらい違法研究所を潰している。

リニスには3年後にプレシアが動く事を言ってある。

俺は、今まで通り、変化の術で研究者に変化して、研究所に侵入し、入り口付近の警備を非殺傷設定で後ろからボコボコにした。

非殺傷設定は手加減しなくても気絶止まりだから便利だな！！

影分身にそいつらを見張らせて研究所内部を捜索中。

今までの研究所では子供が捕まってたりしているのを発見しては解放を繰り返しているがこの研究所ではあまり子供がいない。

いや、既に遅かったか。

俺は研究者に化けながら内部を捜索していたら死体置き場を見つけた。

俺は黙祷してまた捜索を開始すると、重要な物が入ってそうな金庫を見つけた。

研究者を1人捕まえてきて写輪眼で催眠をかけて開けさせると中にはメガネが入っていた。

研究者によると、見たものを内部まで完全に解析できるロストロギアらしい。

何かに使えるかもしれんからもらっておくか。

俺はメガネをポケットにいれたところで、内部を捜索していた影分身たちから研究者と監視員を全員捕まえて外に縛りあげたと連絡が

きた。
後は、管理局に通報してここを焼き払うか・・・。
俺は外に出て研究所を火遁で焼き払い、管理局に通報してから転位した。

＞第５５管理外世界＜

俺が管理外世界から戻るとリニスが俺に怒ってきた。
「マスター、何処へ行っていたんですか？
今日こそは教えてください。」
リニスはだいぶご立腹のようだな。
俺は神に指示され違法研究所を潰してまわってる事はリニスには隠していた。
だが、どうやらバレたようだな。
「マスター！！
早く教えてください。
今日は何が何でも教えてもらいます！！
」
俺は一歩下がるとリニスは俺にバインドを仕掛けてきた。

俺はまんまとバインドにかかり身動きがとれなくなった。

「リ、リニス、お前・・・。
バインドまで使うとは・・・。」

「さぁ、教えてください。
マスターは私に黙って何をしてきたんですか？」

リニスはスゴい気迫で迫ってくるが、俺はリニスを研究所潰しには巻き込みたくない。

「マスター、お願いします。

マスターの事なら使い魔の私にも知る権利があるはずです。」

リニスは真剣に聞いてくるが俺もリニスを巻き込みたくはないから黙秘する。

「・・・・・・・・・」

俺が黙秘しているとだんだんリニスの目に涙が溜まってきた。

おいおい。

「リニス、お前どうし」

「マスターにとって・・・

マスターにとって私はいったい何なんですか！！

マスターは初めて出会った時に何の説明もなしに私を助けてくれました！！

マスターは傷ついた私を優しく、暖かく看病してくれました！！

マスターとは・・・・・半年ほどしか・・過ごしてません

短い間でしたが・・マスターは・・・・・どんな時も・・・・私の味方でいて・・・・くれました。。

私はそんな・・・・。

そんな優しいマスターが・・・・大好きなんです！！

でも・・・・。

でも、マスターは自分の事には一切、私を踏み込ませてくれません！！

私に何も望んでくれません！！

私に自分の・・・・弱さを・・何も教えてくれません！！

血の事だってそうです。

マスターは以前に私の血を見た時、血が苦手と言ってましたが嘘で

すよね。

マスターは血が苦手どころかトラウマのはずです。

他人の血を見るのが・・・何より・・・自分の死よりも恐いはずです。

その事もマスターは何も言ってくれませんでした。

飛行魔法だって自分がプレシアと戦うために・・・

私やフェイトのために戦うと決意してくれました・・・。

今回の事だってそうです。

お願いです。

私を・・・

私を・・少しは・・・・・頼ってください！！

私は・・マスターには・・・・・・・頼りなく・・・見えるかも・・・

しれません・・・

でも・・・・・・

それでも私は・・・マスターの使い魔・・・・・・なんですよ！！
マスターは・・私に・与えるばかり・・・・・・何も・・返させて・ないじゃ・・ないですかっ・・・

使い魔として・・・では無くても・・・いいです・・・
どんな・・・些細な・・事でも・・・・・・構いません・・・。
私を・・・・・・少しは・頼っ・・くださ・・い・・・・・。

私に・・・マスターため・・何か・・・させて・・・・・・・ください・・・・・。
」

リニスの目から涙がポロポロこぼれ落ちて、リニスは泣き出してしまった。

多分、今まで抑えていた感情が溢れ出てきたんだろう。

俺はリニスを出来る限り優しく抱き締めて言った。

「ごめん、リニス。

そんなつもりじゃなかったんだ。

俺は・・・・・・

俺は怖かったんだ。

リニスが俺のせいで怪我をするのが・・・・・・・

俺は転生する前に多くの仲間を失った。

友も・・・・・・・

親も・・・・・・・

恋人も・・・・・・・

だからリニス・・・・。

お前の身には何も起きてほしくないんだ」

「っ・・・・。

マスターは勝手すぎます。

私だってマスターの使い魔なんですよ・・・

マスターとは精神リンクでつながってます・・・・。

だから、マスターの苦しみ、悲しみはある程度わかるんです。

私は・・・

マスターをあの地獄から救いたいんです。」

「ま、まさか・・・

地獄って・・・」

「マスターがいつもうなされている時に見る夢・・・

人が大勢死んでいて・・・

マスターの目の前で女の人が倒れていて・・・

マスターが泣いている夢です。」

俺は愕然とした。

まさか、レミナが死んだ時の・・・

あの悪夢がリニスに流れ込でいるなんて・・・

今すぐ、止めなければ・・・

あんな風景はたとえなどではなく本当の地獄だ。

「リニス！！

今すぐに精神リンクを切っれ！！

あの光景は」

「ダメです！！

あれは・・・

あの夢は・・・私がマスターの・・・苦しみを・・・・・・直に・・

共感できるものです・・・・・・

たとえ、どんな地獄でも・・・

あの夢を見て・・・感じていられる時間は・・マスターの苦しみを・

・・・この身に直に・・感じられるんです。

だから・・・」

「バカな事、言うな！！

あの地獄、常人なら小一時間見ただけで・・・

簡単に気が狂うぞ！！」

「構いません！！

気が狂ったとしても・・いいんです。

マスターの苦しみを少しでも理解できる・・・・・。

マスターの悲しみを背負う事ができる・・・・・。

私には・・・・・それが・・・とても・・うれしいんです。

私はマスターの・・使い魔になってから・・・・・何もマスターに・・・してあげられませんでした。

だから・・・せめてマスターの苦しみを・・・・・背負い・・・・たいんです。

お願いします、マスター。

私の・・・マスターとの・・・絆を・・断ち切ら・・・ないで・・・ください・・・・・。

少しでいいですから・・・

マスターの苦しみや悲しみを私に背負わせてください・・・・・・。

」

俺はそれ以上リニスに何も言わなかった。

いや、言えなかった・・・。

リニスも何も言わなかった。俺たちはお互いに抱き合ってしばらく

すごした。

空を見ると・・・きれいな夜空だった・・・・・・・・。

うちはミズチ転生記９（後書き）

しばらくは休載すると思います。

すみませんです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9833k/

魔法少女リリカルなのは とあるうちはの転生記

2010年10月8日14時07分発行